インフィニット・ストラトス～嵐を纏う狼～

ジャッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス～嵐を纏う狼～

【Ｎコード】
Ｎ５５４７Ｓ

【作者名】
ジャッキー

【あらすじ】
大神真人は、他校の不良と喧嘩の末、ナイフで刺され死亡した。
その先に待っていたのは、新しい命の始まる場所
そこで、幼い頃に失った家族と人生をやり直す機会を得るも、今までの生き様に誇りを持つ真人はそれを蹴って、別の世界で生の続きを送る事を選ぶ
女尊男卑の新たな世界
そこで、真人を待ち受けるものとは・・・。
蒼穹で今、狼が雄叫びをあげる

新たなる生（前書き）

ＩＳの二次小説を読んで、勢いで原作を読まずに書いてしまった反省はしていますが、後悔はしてません。
これから原作を読んで、すこしずつ書いていこうと思います

新たなる生

自分でも、ろくでもない人生だったと思う。
親は二人とも事故で死に、生き残ったのは俺だけ
親戚は居ないも同然だったから、今は親が遺した家で一人暮らし。
そういった人間ほど、馬鹿どものターゲットになり易いのか・・・
度々絡まれた事もある。
正直、ウザかった。
絡んでくる奴らが、人を見下したような目をしている奴らが
ソイツらを、手当り次第にボコった。
そうしているうちに、俺は自然と学校で浮いた存在になったし、最
初は同情して寄ってきた奴らから避けられるようになった。
更には、俺も変わっていった。
親父ゆずりの黒かった髪は銀に染めた。
周りの奴らの接し方によるストレスから、高校に入ってからはタバ
コにも手を出した。
相も変わらず寄ってくる馬鹿を返り討ちにしていると、いつの間に
か『銀狼』とか痛い渾名をつけられた。

でも・・・悪い人生じゃなかった。
頭の弱い不良にしては芯がある奴が居た。
舎弟を自ら名乗ってまとわりついてくる馬鹿が居た。
なんだかんだ言って、俺の世話を焼く教師や幼なじみと、その家族
が居た。
そして・・・8年しか一緒に居られなかったけど、俺を大切に育て
てくれた親が居た
だから・・・悪くなかった。

薄れて行く意識の中で、馬鹿どもの声が聞こえた。
眠い目を無理矢理開いてみると、自称舎弟のバカと何度も殴り合った馬鹿が居た。
視線を下に向けると、着崩した学ランの間から見えるYシャツその腹の部分から、見慣れた紅が見えた。
あぁ・・・そういや
他校の不良と喧嘩した時、ナイフで刺されたんだっけか。
ハハッ・・・ざまぁねぇな。
道踏み外したから、罰でも当たったか？
ふと、馬鹿どもの視線とは別の視線を感じたから、視線を移動させると・・・何時も世話を焼いてたアイツがいた。
アイツ・・・なんで此処に居るんだよ。
お前が居るような場所じゃねぇってのによ・・・。
俺に何か言ってるのが分かる。
でも・・・もう聞こえねぇ。
前が霞んできやがった・・・死ぬって、こういう感じなんだな。
あぁ・・・眠い。
馬鹿どもが『死ぬな』とか言ってるけど・・・無理っぽいわ。
ろくでもねぇ人生だったけど・・・楽しかった。
あばよ・・・友人（バカども）。
そう呟いて・・・俺は目を閉じた。

「・・・ろ。お～い・・・」
「・・きろって・・・」
なんだよ、ウルセェな・・・。
「起きろって・・・」
起きろとか無理言うなよ・・・。
・・・って、あれ？なんで声が聞こえてんだ？
俺・・・死んだんだよな？

「起きろォォォォォォォォォォォォォォォ！」
「ウルセェェェェェェェェェ！」
耳元で大声で喚かれてついにキレた俺は、上体を起こして怒鳴った。
「っ・・・・」
耳元で喚いていた・・・体に似合わないブカブカの上着を着た8歳くらいの幼女が耳を押さえて蹲る。
「ったく・・・どうなってんだよ。俺は死んだんじゃ・・・・」
そう言って、俺は立ち上がって辺りを見回した。
見えた光景は・・・何もない。
俺が居た場所は、使われてない倉庫だった
それに、俺が目を閉じてまだ時間が経ってない
此処は・・・どこなんだ？
「ったく、ひっどいな〜・・・私が何したっていうのよ」
「耳元で喚き散らすんじゃねぇよ、ガキ」
耳鳴りが収まったのか、幼女が文句を言ってきたので適当にあしらう。
そうだ・・・このガキなら、なにか分かるかもしれねぇ。
「・・・おい」
「？」
「此処は何処だ？」
「此処？ここはね・・・はじまりの場所だよ」
ガキの言葉に、俺は唖然とした。
「はじまりの場所だ？」
「そ。キミは、自分がどうなったか知ってるよね？」
「あぁ・・・」
「ここはね、死んだものや、新しく生まれようとしているものに命を授ける場所・・・言い換えれば、天国かな」
ガキの言葉に、俺は信じられないけど一応納得できた・・・けど
「なんで俺が天国なんて場所に居るんだよ・・・つか、お前誰だ？」

「神様です」
「は？」
ガキが宣った言葉に、俺はアホみたいに呆けた顔をしちまった。
「いや、だから神様だって」
・・・ガキにしか見えねぇんだけど。
「まぁ、最年少ですから」
そう言って、自称神様のガキは無い胸をこれでもかと張る。つか、考え読むなよ。
「神様だからこれくらい簡単だよ・・・ってか、胸が無くて悪かったな！」
自慢げに頷いたかと思ったら、更に考えを読んだみたいで・・・怒って脛を蹴ろうとしてきたので、頭を押さえて動きを妨げる。
「本当に神様かよ？どっからどう見てもガキなんだけど」
「失礼な・・・これでも、キミの１０倍は生きてるんだよ？」
じゃあ、ババアか。
「誰がババアよ、キミ達の年齢で換算しないでよね！」
そう言うと、自称・・・面倒くせぇからガキでいいか。
ガキは自分の事を説明し始めた。

自分達・・・神が人間よりも倍生きていること
そのくせ、外見は年齢の２０分の１だと言う事。
そんで、ガキは最年少でこの場所の管理を任されたらしい
・・・ぶっちゃけ、どうでも良い。
「で、お前のことは分かった・・・で、なんで俺は天国なんかに居るんだよ」
「今までの人生を見たけど、キミは盗みも殺しもしてない。まぁ、少し校則と法律違反はあるけどね。それで・・・キミには、新しい人生を楽しんでもらおうかと思って」
そう言いながら、ガキはどっから出したのかバインダーに挟んだ紙をパラパラと捲る。

一見すると、普通に仕事をしているように見える。でも・・・
「ガキ」
「ん～、何？」
「何を隠してやがる」
俺がそう言うと、ガキは紙を捲る手を止めて俺を見る。
「・・・どうして、そう思うのかな？」
「・・・確証はねぇ。ただ、そう思っただけだ」
ガキを見たままそう答えると、小さくため息を吐いた。
「・・・キミの両親が死んだ時、二人は凄く悔やんでた」
そう呟くと、ガキは話し始めた。
「もっと一緒に居たかった・・・また生まれ変わった時は、キミの親としてまた人生を歩みたいってね。そこまで言ってるのを聞いて、キミを地獄には落とせないよ」
話しながら、ガキは苦笑いを浮かべる。
「だから・・・キミには、あの2人の子供として生まれ変わってほしいなって」
そう呟くガキをみて、俺は親に愛されてたんだな・・・と再度思った。
あの2人とまた暮らせるってのは、凄い魅力的だ
でも・・・
「・・・生まれ変わらないって、出来るか？」
「・・・え？」
俺の言葉に、ガキは唖然とした表情で俺を見た。
「だから、生まれ変わらない事は出来るか聞いてんだよ」
「・・・理由を聞いて良い？」
俺の言葉を理解したのか、ガキは怒りを含んだ表情で俺を見る。
「あの2人の子供に生まれ変わるのは魅力的だって感じるんだけどよ・・・俺の親は、後にも先にも8年しか過ごせなかったあの2人だけだ」
「親が聞けば複雑だね」

んな事分かってんだよ。
「それでも、俺は今までの人生をリセットしたくねぇ。ろくでもなかったけど、悪くねぇ人生だったからな」
「そっか・・・まぁ、出来なくはないよ」
そう言うと、ガキは1枚の紙を俺に見せてきた。
「キミに新しい体を与えて、別の世界で生き返らせる。ただし・・・場所は私が決めるけどね」
「新しい体？」
「望みであれば、何歳の時の体でも。あと・・・世界によっては、生き残る術をあげる」
ガキの言葉を聞きながら、俺は苦笑いを浮かべる。
生き残る術って・・・危ないことは無いだろ？
「そんな事ないよ。世界は無数にあるから・・・世界によっては、魔法もあるよ？」
マジ？
「本気と書いてマジ。それで・・・どうする？」
そう言って、ガキは俺を見る。

「・・・乗った」
「後悔は？」
「今聞いて分かることじゃねぇだろ」
「そうだね。で・・・体はどうする？」
そう言われ、俺は考える。
その時、俺はあのバカどもの事を思い出した。
「・・・死んだ時の体だ」
「って事は・・・17歳だね」
「あぁ」
「分かった・・・じゃぁ、次は世界か」
そう言うと、ガキは上面に穴の空いた立方体・・・所謂くじ引きBOXを取り出し、手を突っ込んだ。

「何が出るかな・・・・・・っと・・・・」
そう言いながら、半分に折られた紙を取り出して開くと、小さく苦笑いをする
「ＩＳか・・・・大変そうだね」
「ＩＳ？」
俺の質問に答えるように、ガキは説明を始める。
俺が行く世界には、インフィニット・ストラトス（ＩＳ）と呼ばれる兵器が存在するらしい。
本来、宇宙での活動を想定して作られたそれは、ある事件を機に軍事転用されるようになった。
ただし、そこで問題が一つ
その兵器ってのは、女しか使えねぇらしい。
そのせいで、その世界は女尊男卑が当たり前になっちまったとか。

「それで・・・・どうする？」
説明を、分かりやすく頭に叩き込んでいると、ガキが俺を見てきた。
「気に入らねぇ」
「アハハ・・・・予想通りの言葉をありがとう」
即答した俺を見ながらガキが苦笑いを浮かべる。
他人から見下されるのは気に入らねぇ。
それも、それが当たり前だ？
「・・・・で、その世界で生き残るには、どうすればいい」
「そうだね・・・・何もなければ、キミは女の子に見下されるだろうし。だったら、一つ」
「ＩＳか」
「ご名答」
そう言って、ガキが銀色の球を俺に差し出してきた。
「コレは？」
「キミにしか使えないＩＳだよ」
ガキの言葉を聞きながら、俺は球・・・・ＩＳを受け取る。

「名前はないから、キミが決めてね」
その言葉を聞いて、俺は考え始める。
・・・考え始めて3分経った頃か
銀色に輝く球を見て、俺は笑みを浮かべた。
なんだ・・・あるじゃねぇか。
馬鹿どもが呼んでた俺の渾名
『銀狼』の他に、もう一つ。
「決めたぞ。コイツの名前は・・・フローズヴィトニルだ」
「フローズヴィトニルって・・・神様の前で、その名前にする？」
「名前は俺が決めろって、お前が言ったんだろうが」
そうだけど・・・と言って、ガキは苦笑いを浮かべる。
「ま、良いでしょ。そんじゃあ送るけど・・・何か質問ある？」
ガキが言った言葉で、俺は前から気になってた事を聞いた。
「お前、名前は？」
「あれだけガキって呼んどいて、まったく・・・希沙羅よ」
そう言って、ガキ・・・希沙羅は俺を見て笑みを浮かべる。
「そうか、分かった」
「他に質問もないみたいだし・・・送るわね。肉体と戸籍は既に向こうの世界に用意してるから」
そう言って、希沙羅が俺に向かって手を突き出す。
「向こうで、キミの人生に幸がある事を願うよ」
「あぁ、恩に着る」
「じゃぁね・・・『真人』」
「あばよ・・・ガキ」
「ちょ！良い場面なのにガキって言う！？普通は名前じゃない！？」
次第に薄れて行く意識の中で、希沙羅がそうつっこむのを聞き、俺は笑いながら目を閉じた。

出逢い、そして覚悟

あのガキ・・・希沙羅と別れて数時間経った頃だろうか
鳥の囀りと、光が俺の瞼と耳を刺激した。
「ん・・・」
ゆっくりと目を開けると、日の光が過剰に目を刺激してきやがった。
目を開けて、最初に見えたのは木と青空
それを見て数分、ようやく俺は生き返る事が出来たと感じた。
「んっ・・・体は、思ったより普通だな」
目と耳が完全に慣れたのを確認すると、起き上がって軽く体を動かしてみる。
生まれたての子牛みたいに立つのも大変と思ってたけど、案外そんな事は無く、何時ものように体を動かせていた。
ちなみに・・・学ランの間から覗くTシャツを捲ると、腹にはナイフで刺された傷跡があった。
辺りを見回してみると、周りは草木に覆われ、少し視線を上に動かすと、近未来的な建物が見えた。
『目が覚めたか』
周りを見ていると、後ろから声が聞こえてきた。
「あん？」
俺以外の気配もねぇのに、なんで声が聞こえやがんだ？
そう思って、訝しげに後ろを振り向くと・・・銀色の狼が木の根元に座っていた。
その体は、生物的なじゃなく機械的で、蒼い眼には瞳孔がない。
「テメェ・・・何だ？」
『やれやれ、名前をつけた相手も分からんか？まぁ・・・球体だった姿がこんなになっているんだ、分かるはずも無いか』
そう言って、呆れたような口調で狼が話すのを聞いて、俺は疑問を

感じた。
球体だった・・・名前をつけた・・・その言葉で、俺は目の前にいる狼が何か分かった。
「まさか・・・フローズヴィトニルか？」
『あぁ』
確認の為に名前を呼ぶと、狼・・・フローズヴィトニルから肯定の返事が返ってきた。
「変わり過ぎだろうよ・・・」
『量子変換で姿を変えた。まぁ、ＩＳの特徴とでも思えば良い』
思えば良いって、簡単に言うんじゃねぇよ。
まぁ・・・フローズ・・・長ぇからヴィルで良いか。ヴィルの事に関してはそこまでにして、俺は改めて辺りを見回した。
「そう言えばよ・・・此処は何処だ？」
『此処か？此処は恐らく・・・』
「ＩＳ学園。ＩＳを扱える者を育成する学校だ」
俺の質問にヴィルが答えようとしていた時、俺たちの後ろから声が聞こえた。
気配も感じずに声が聞こえた事に、反射的に振り返ると・・・そこには、スーツを着た長身の女と
隠れるように立っている眼鏡をかけた女が居た。
「・・・テメェ、誰だ」
「私は織斑千冬。この学校・・・ＩＳ学園の教師だ」

千冬視点
「織斑先生！」
新入生の書類をまとめていた私のもとへ、山田先生が慌てて走ってきた。
「どうしたんだ、山田先生」
「えっと、その、あの」
「ほら、とりあえず深呼吸して落ち着け。何も逃げたりしないぞ」

息を切らせながら慌てて話そうとする山田先生を落ち着かせながら、私は黙々と作業を続けて行く。
「ふぅ・・・」
「それで、どうしたんだ？」
「そうでした！実は、学園の中庭に男の子が倒れてたんです！」
その言葉に、私は手を止めて山田先生の方を向く。
「そんな訳無いだろう。此処は関係者以外の立ち入りは出来ないんだぞ？」
「本当ですよ！ついてきて下さい！」
「・・・やれやれ」
再び中庭へと走って行く山田先生を見て、私はため息を吐きながら吐いて行く事にした。

そして・・・中庭に着いたのだが、山田先生の言う通り、そこには１人の少年と１匹の狼が居た。
少年の身長は１７０強程、年齢は弟の一夏より１つ上くらい
短く、逆立てた銀髪に、鋭いブラウンの瞳
黒い学ランの前はボタンを全て開き、下に着ている白いＴシャツが見えている。
その少年の警戒する様子は、刃物のようであり、また・・・獣のようだった。
「あの・・・君の名前は？」
緊迫した空気に堪えられなかったのだろう。
山田先生が少年を見て恐る恐る名前を尋ねる。
少年は、山田先生を見て小さくため息を吐くと、少しだけ警戒を解いて「大神真人」と名前を呟いた。
「大神君か・・・私は山田真耶。織斑先生と同じで、この学校の先生をしています」
少しでも、少年・・・大神の警戒を解こうと話している山田先生を一瞥し、私は再び大神を見る。

警戒する様子は獣のようであり、髪は銀色
おまけに、名前は大神ときた。
（大神だけに狼・・・それも、銀狼か）
そう考えているうちに、山田先生と大神の間で此処に来た理由などを生徒指導室で話す事が決まっていた。

真人視点
山田とかいう先公と話しているうちに、生徒指導室で詳しい話をするって事になった訳だけど・・・
「で、私がお前の話を聞く事になった訳だが・・・」
俺の前には、スーツを着た長身の女・・・たしか、織斑だったかソイツが座っていた。
「まず、お前の名前をもう一度聞かせくれ」
「・・・大神真人だ」
織斑の質問に短く答えると、織斑の隣に座っている山田がメモを取っている。
「何故この学園の中庭に倒れていた」
「・・・」
織斑の言葉に、俺は言葉に詰まってしまった。
一回死んで、別の世界で生き返らせてもらったなんて、話して信じるかと言われたら・・・よほどのお人好しか馬鹿以外に信じる奴はいないだろ。
「私達には言えないのか？」
「・・・言えるけど、テメェらには信じられねぇ話だ」
「それでも言え。それから、信じるかは私たちが決める」
織斑の有無を言わせねぇその言葉に、俺は軽く舌打ちをして話し始めた。
「俺は・・・もともと此処じゃねぇ世界の人間だ」
そう言って、俺は今までの人生の事を話始める。
８歳の頃に親が事故で死に、幼なじみの家で半居候生活をしていた事

その事で周りの馬鹿どもに絡まれ、何度も喧嘩をするうちに周りに誰も寄ろうとしなくなっていったこと。
それでも、俺に世話を焼いてくれた先公や幼なじみ家族のこと
何度も全力でぶつかり合った奴らの事
そして・・・俺の1度目の最期と、その先での事
あまり話さないつもりだったのが、気づいたら全てを話していた。

話が終わった頃、織斑は考えるように眼を閉じ、山田は・・・号泣してた。
「にわかに信じられん話だ・・・だが、その話が本当なら証拠があるはずだよな」
「あぁ、ほら」
織斑が眼を開け、俺を見て言うのに対して、俺はTシャツを捲った。
そこには、腹に刻まれた塞がって1ヶ月ほど経っただろうナイフの刺し傷
「・・・分かった、お前の話を信じよう」
その傷を見ると、織斑は小さく頷きながら呟いた。
「俺が嘘吐いてるかもしれねぇぞ？」
「これでも、人を見る目は確かだ」
「そうかよ」
その言葉を聞いて、俺は微かに口元を歪めて笑みを浮かべた。
「あの・・・」
漸く泣き止んだのか、山田が涙眼で俺を見てきた
「本当に、ご両親と過ごす未来を選ばなくてよかったんですか？」
「さっきも言ったが、俺は人生をリセットしたくねぇ。親父達と過ごす人生は魅力的だけど、あの人生はあの人生で悪くなかった。それを無かった事にすんのは嫌なんだよ」
それに、と山田を見る。
「自分(テメエ)の人生は自分(テメエ)のもんだ。後悔はしてねぇ」
そう言って、俺が笑みを浮かべた瞬間、山田は僅かに顔を赤らめた。

全ての話が終わったあと、織斑が俺を見て口を開いた。
「大神、お前にはこの学園に入学してもらう」
要約すると、こうだ。
ＩＳは本来、女にしか扱えない。
しかし、それを扱える男が出てきたらどうする？
国々に狙われ、最悪・・・実験動物（モルモット）だ。
だが、この学校・・・ＩＳ学園は、在籍している期間はそんな馬鹿どもからの干渉を受けない隠れ蓑として使えるらしい。
現に、織斑の弟・・・たしか、一夏だったか？
ソイツも入学が決定してるらしい。
「あぁ、良いぜ。その代わり・・・」
そう言って、俺は織斑と山田を見る。
「入学式までに俺にＩＳについて教えてくれ」
それから数週間、山田の指導で俺はＩＳの基礎知識と基本動作を覚えていった。
山田の教え方は的確で、分からねぇ所も丁寧に教えてくれた。
ただ・・・基本動作で問題が起きた。
ＩＳは、ある程度の経験を積めば「形態移行」が行われ、使う奴に適した形態に形状や性能を変化させる。
だが・・・ヴィルは、形態移行の第一段階「初期化」と「最適化」を拒んでいることが分かった。
その事が分かった日の夜、俺はヴィルに聞いてみた。
すると・・・
『私の担い手はお前になっているが・・・私自身、お前を認めた訳ではない。まずは私を認めさせてみろ』
だそうだ。
それを聞いてから、俺は一層基本動作を学んでいった。
それから数日後
入学式１週間前になった頃か。

俺は、織斑に呼ばれて第３アリーナに来ていた。

「で、俺を読んで何の用だ？」

「お前の今の実力が見たくてな。すぐにヴィルを起動させろ」

そう言う織斑は既に訓練機「打鉄」を纏っている。

小さくため息を吐き、ヴィルを起動させると、俺は織斑に向かい合った。

ヴィルを起動させた俺の姿は今までのＩＳにない西洋甲冑を模した全身装甲に覆われた。

初期武装は・・・ない。

本当の事を言えば、あるにはあるが使えない。

その理由も、ヴィルが形態移行を拒否している事が原因にある。

「ふむ。では始めようか」

「あぁ・・・」

織斑が近接ブレードを展開して構えるのを見て、俺は右手で拳を作り、腰だめに構える。

互いの間に緊迫した空気が流れた瞬間・・・俺は一気に織斑との距離を詰めた。

「フッ！」

「甘いな」

移動の際の勢いを乗せた右ストレートを繰り出すが、織斑はそれを難なく躱して上段からブレードを振り下ろす。

ギィンッ！

「ほぉ」

「チッ・・・」

今までの人生から、３０人近くの不良に囲まれて喧嘩をした事はあったし・・・後ろからの急襲なんてのもよくあった。

その経験から、反射的に蹴り上げた左足と近接ブレードがぶつかり合い、鈍い金属音が辺りに鳴り響く。

「足癖が悪いぞ、大神」

「不良なんだ・・・仕方ねぇだろ！」
そう言って、俺と織斑は互いに距離をとる。
それからは、完全にワンサイドゲームだった。
俺の拳や蹴りは難なく織斑に躱され、カウンターを何度も受け続けていくうち
シールドエネルギーは残り僅かになっていた。
「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」
「今の実力で、武装もなしにここまで持つとは、大したものだな」
相手が悪かった、と言えばそうだろう。
織斑は第一世代ＩＳ操縦者の元日本代表
その力は、現役を退いた今でもほぼ衰えていない。
（ハッ・・・まるで「あの頃」の再現だな）
勝ち目のないこの状況下・・・前の人生の事を思い出していた。

「銀狼」とか妙な渾名で呼ばれて、恐れられていた頃
負けなしと噂されていた俺も、たった一人・・・勝てなかった奴が居る。
ソイツに出会ったのは、高校1年生の頃。
『お前が銀狼か。校内の馬鹿どもが噂していたな』
ソイツは、学ランをきっちりと着こなし、常に冷静だった。
当時の俺は、自分以外の周りが鬱陶しく、誰とでも喧嘩を行っているような馬鹿だった
無論、目の前に居たソイツにも喧嘩を吹っかけた。
だが・・・結果は完敗だった。
『これが銀狼の実力か・・・実に弱いな』
倒れて息を整える俺を見下ろしながら、奴が口を開いた。
ふざけんな。俺が弱い？
『あぁ、実に弱い。お前の拳は、何も籠ってない』
『お前は、その拳に何か意志を込めているのか？』
・・・。

『理由のない力は暴力に過ぎん。お前の拳は、まさにそれだ』
じゃあ、テメェは・・・何か理由があんのかよ
『あぁ。俺は生徒を統べる者として・・・生徒を守る為に、時には拳を使うと決めている』
守る・・・ねぇ。
『無論、そこにはお前達のような不良も含まれる』
・・・あ？
『俺は、お前達が余計な道に進まないようにする為にこの拳を使う。お前達も、ここの生徒だからな』
んなもん、先公のやる事だろうが。なんでテメェがやんだよ。
『俺がしたいからだ』
・・・なぁ。
『ん？』
俺は・・・弱いんだよな？
『あぁ』
どうしたら、強くなれる？
『強さはそれぞれだ。でも・・・』
？
『大切なものや人・・・居場所（ナワバリ）を守りたいと思った時、人は今以上の力を出すそうだ』

（まったく・・・あの生徒会長に毒されて、俺も丸くなったもんだよ）
そうだ・・・あの言葉から、俺は何か変わった。
大切な人やもの・・・それを探してみたら、案外近くにあった。
俺をガキの頃から面倒見てくれた幼なじみと、その家族、教師
何時も俺につきまとい、ぶつかり合った馬鹿ども
ソイツらと過ごす時間・・・日常が、俺にとっての
「居場所（ナワバリ）」になっていた。
ヴィル、聞こえてんだろ

今は何も無ぇ。
でも・・・
あの友人(バカども)みたいに
俺に寄ってくる奴らが出てくるかもしれねぇ。
そんな奴らと日常が出来るかもしれねぇ。
そん時・・・
それが踏みにじられんのは、無性に腹が立つ。
だから・・・
俺に・・・居場所(ナワバリ)を守る牙(チカラ)をよこしやがれ！

真耶視点
私・・・山田真耶は、第3アリーナの管制室で、大神君と織斑先生の模擬戦をモニタリングしていました。
最初は大神君も善戦していたんですが、途中からは織斑先生のペースに呑まれ
大神君のシールドエネルギーも残り僅か
あと数回で、勝負が決する所でした。
そんなとき・・・。
「え？！」
ボロボロになった大神君を中心に、辺りが銀色の光に包まれていきます。
それだけじゃありません。
大神君のＩＳ・・・ヴィル君のデータも瞬く間に異変していきました。
「これは・・・一次移行(ファーストシフト)？！」
今まで、ヴィル君はどういう訳か、形態移行を拒否し続けていました。
それが、今になって起きるということは・・・。
「大神君・・・」
認めてもらえたんですね・・・。

ヴィル君に、貴方の思いが。

千冬視点
大神のＩＳを中心に、銀色の光が放たれたのと同時に、大気が大神に収束していく。
「これは・・・」
たしか、大神のＩＳは何故か形態移行を拒否しているという話を山田先生から聞いた。
勿論、その理由も。
この現象がどういう意味を持つか、私には分からない。
だが、私の予想が正しければ・・・。
「大神・・・」
お前は、ヴィルに覚悟を認められたと言う事だろう。
ならば
「見せてもらうぞ・・・ お前の覚悟を」
そう呟いたと同時に、光が収まっていく。
その中心には、大神は居なかった
その姿は、パワードスーツや全身装甲というよりも獣・・・ いや、違う。
体は、獣と人の中間といえる姿。
頭は、今までのＩＳにはなかった、獣・・・ 狼を模している。
蒼く、鋭い瞳を持つ大神の姿は、こう表現した方が良いかもしれない。
【蒼眼の人狼（ブルーアイズウェアウルフ）】

真人視点
『初期化と最適化を完了』
まず言っておくと、何が起きたのか分からなかった。
『おい、聞いているか？』
「お、おぅ」

ヴィルの呆れたような声を聞いて、俺は我に返った。
『お前の覚悟は聞かせてもらった。俺はお前を認め、お前の牙となろう・・・主(マスター)』
その言葉を聞いて、俺は笑みを浮かべた。
「おぅ。頼りにしてるぜ、相棒(ヴィル)」
そう言って、俺は向かい合う織斑を見た。
『残るシールドエネルギーも少ない。この一撃で全てが決まる』
ヴィルの言葉を聞きながら、俺は残存するシールドエネルギーを確認する。
織斑の一撃を受けたら、そこで俺は負ける。
でも、勝ち負けなんてのは、最初から関係ねぇんだ。
だが・・・。
「お前から貰った牙(チカラ)・・・一撃だけでも、刻み付ける！」
そう言って、俺は右の拳(ツメ)に力を込める。
『了解、大気圧縮開始』
俺の言葉にヴィルが肯定すると、今の姿の全体図と各数値が表示される。
一次移行したヴィルは、背部にあるたてがみを模したメインスラスターと脚部のサブスラスター
それと・・・機体内部に収束・圧縮した空気を放出する事で爆発的な機動力を生み出すらしい。
『各スラスター正常機動、空気圧縮率１００％』
「・・・噛み砕く！」
そう言って・・・俺は音速を超えた。
一気に加速して、織斑とぶつかり合って離れるまでの時間は・・・僅か１秒。

「やっぱり・・・敵わねぇな」
そう言って、織斑を見る俺は、シールドエネルギー０
対する織斑は、打鉄の右肩装甲の破損と近接ブレードが折れた程度。
「そんな事はない。ＩＳを起動させて一ヶ月程度の人間で、私に一撃入れたんだ・・・よく成長したな」
その言葉を聞きながら、ヴィルが強制解除された俺は、意識を手放した。

千冬視点
シールドエネルギーが０になった事でヴィルが強制解除され、地面に向かって落ちていく大神を支え、ピットへと戻る。
そこでは、山田先生が心配そうな表情で待っていた。
「大神を頼みます。私はヴィルを回収してくる」
そう言って、私は再びアリーナに向かった。
『さすが、ＩＳ世界大会・・・モンド・グロッソの優勝者だった事はあるな』
「機動させて一ヶ月程度しか経っていない奴に負けはせん。だが・・・」
ヴィルの言葉に返答を返しながら、私は大神が一撃を入れた右肩を見る。
「その程度の奴に、一撃を入れられたのは初めてだ」

真人視点
「ん・・・」
深い水の底から浮かび上がるように、俺は意識を取り戻した。
そういえば・・・織斑との模擬戦は、俺が負けたんだったな。
「良かった・・・気がついたんですね」
未だにハッキリしてない意識のなか、山田の声が聞こえたので視線をずらすと、椅子に腰を降ろした山田が俺を心配そうに見ていた。
此処は・・・学園の保健室みたいだな

「大丈夫ですか？」
「あぁ・・・気絶なんて、向こうではよくあったことだしな」
山田の言葉に手短に返事を返しながら、俺はハンガーにかけられた学ランの袖に腕を通す。
「なぁ」
「はい・・・」
「俺は、負けたんだよな？」
「・・・はい」
俺の質問に、山田は戸惑いながらも答えてくれた。
「そうか」
その言葉を、俺は笑って受け止めた。
「悔しいですか？」
山田に背を向けてるから、今のアイツがどんな表情をしてるか俺には分からない。
多分、どう声をかけたらいいのか分からねぇんだろうな
「悔しくねぇっていえば、嘘になるな。でも・・・俺は、織斑との試合には負けたけど、ヴィルとの勝負には勝った」
俺の言葉を聞いて、山田の雰囲気が少し和らいだのを感じる。
「俺は強くなりてぇ。新しく出来るかもしれねぇ居場所（ナワバリ）を守る為に」
だから・・・
そう言って、俺は山田を見る。
「これからもよろしく頼むわ、先生」

買い物（前書き）

今回の話は・・・グダグダだったと思います。
自分もまだ未熟だと感じますが、楽しんでいただけたらと思います

今後の更新ですが、近くの書店に原作がなく、妥協案としてアニメとコミックスを基盤として暫定で作り、原作入手次第第加筆、修整を行いたいと思います

買い物

あれは・・・織斑との模擬戦が終わって数日後
学園の入学式が始まる1週間前くらいか。
俺は、織斑と山田に呼ばれて朝からヴィルの稼働データをとっていた。
「そういえば、大神はそれと学校指定の制服以外の服を持ってないんだったな」
稼働データに眼を通していた織斑が、俺を見てそう言ってきた。
織斑の言う「それ」とは、俺が生き返ったときから着ていた学ラン。
それ以外の服は・・・昨日、山田から貰った制服くらいだ。
「つか、あのガキに貰ったのは体と戸籍、あとは金だけで・・・服とか家なんて貰ってねぇし」
「そうか・・・」
俺が返事をすると、なぜか織斑は考えるように呟いた。
ちなみに、金は俺の学ランの内ポケットに通帳が入っていた。
希沙羅が用意してくれたんだろうが、その額は高校生が持っておくには危険すぎる金額。
それが発覚した日に、通帳は織斑に預けている
「・・・うむ。大神、今から山田君と買い物してこい」
「は？」
その一言を聞いて、俺は間の抜けた返事をしちまった。
結局、俺は山田同伴で駅前のショッピングモール「レゾナンス」に来ていた。
「ったく・・・買い物くらい一人で行けるっつの・・・俺はガキか？」
「あはは・・・まぁ、此処に来ての買い物は初めてなんですし、迷ったら大変ですからね」

織斑の有無を言わさない言葉に不満を述べていると、山田は苦笑しながら俺をなだめるように言う。
「・・・なぁ」
山田の言葉遣いを聞いて、俺は声をかける。
「どうかしました？」
「まぁ、出来たらで良いんだけどよ・・・その敬語は止めてくれ。お前の方が年上だろうが」
「え、でも・・・」
「敬語で話されるのは慣れてねぇんだよ。周りに居た奴らは先公だろうが年下だろうがタメ口だったからな」
「えっと・・・こ、これでいい？」
少し戸惑いながら、敬語を崩した山田を見て俺は笑みを浮かべた。
「さて、じゃあ行くか」
そう言って、山田同伴での俺の買い物が始まった。

最初に、俺たちは衣料品売り場に来ていた。
「えっと・・・大神君は普段、どんな服を着てたの？」
「そうだな・・・部屋着はジャージだな。外に出る時は・・・」
そう言って、俺は適当に洋服を見て回る。
そのとき、俺は一体のマネキンに眼を留めた。
着ている洋服は、白い無地のTシャツに黒いシャツを羽織っていて、下は七分丈のジーンズ
ベルトを通す部分からはポケットに向かってウォレットチェーンが伸びている。
「こういったのが多いな」
俺は、山田に話しながら籠にマネキンが着ているものと同じ服と数着の服
それとジャージを入れて会計に向かった。
「洋服は買いそろえたし・・・次はどうすっかな」

会計を済ませた俺と山田は、吹き抜けになった広場のベンチに腰を降ろしていた。
「そうですね・・・」
「敬語、出てんぞ」
「あ、その・・・ごめんね？」
敬語で話すのを聞いて、小さく呟くと、山田は慌てながら謝ってくる。
「気にすんな」
そう言いながら、俺はふと山田を見る。
コイツは・・・正直言えば、ガキが無理して背伸びしてるように感じる。
身長やら童顔っつーのもあるけど・・・眼鏡のサイズが合ってねぇな。
今までも、眼鏡がズレて直してるのを見てきた。
・・・仕方ねぇ。
「よし、行くぞ」
「え？行くってどこに？」
「ついてくれば分かる」
立ち上がった俺を見上げてくる山田を一瞥して、俺は呟いた。

俺が山田を連れて来たのは、眼鏡売り場。
「あの、大神君？」
未だに状況を呑み込めてねぇ山田を置いて、俺は店内の眼鏡を物色していく。
「山田」
「は、はいっ！」
眼鏡を物色しながら山田を呼ぶと、若干驚いたような様子を見せて返事をして、俺の方へ来る。
「これ、掛けてみろ」
山田が来た事を確認すると、俺は棚においてあったツーポイントフ

レームを渡した。
「え、あの」
「良いから、早く掛けろ」
「はい・・・」
戸惑っている山田に有無を言わせない言葉遣いで言うと、諦めたように掛けていた眼鏡を外して渡したフレームを掛ける。
「えと、どう・・・ですか？」
フレームを掛けた山田を見たが・・・あまり似合ってない。
そう思って山田からフレームを外すと、次、また次とフレームを掛けさせていった。
そうして２０分くらい経った。
山田に合うフレームが未だ見つからず、山田も少し疲れてきていた。
（これで見つからなかったら、諦めっか・・・）
そう思いながらふと棚を見ると、一つのフレームに眼がとまった。
スカイブルーの金属フレームのフルリム
レンズのサイズも野暮ったさがない。
「最後に、これ掛けてくれるか？」
そう言って渡したフレームを、山田は少し疲れた様子を見せながら掛けた。
「えと・・・どうですか？」
そう言って、俺を見てきた山田を見ると、似合っていた。
緑がかった髪色に、スカイブルーのフレーム
着ている服にも合わせやすいと思うが・・・まぁ、それは人それぞれの感じ方だし、参考になるかは分からねぇけど。
「似合ってるぞ。さて・・・」
山田にそう言うと、俺は店員を呼んで、山田の視力を測ってもらった。

レゾナンスを出た時には、日が暮れ始めようとしていた。
「大神君」

歩幅が合わず、つい俺が先を歩くなか、山田が俺を呼んだ。
「あ？」
「あの、なんで・・・」
そう言いながら俺を山田は俺を見てくる。
多分、話の内容は眼鏡売り場での事だろうな。
「礼だ」
山田を見ねぇで、歩きながら俺は話す。
「お前には、基礎知識に基本動作・・・そういった事で世話になったからな」
そうだ・・・織斑もそうだけど、山田には特に世話になった。
これは、俺の個人的なお節介ってヤツだ。
「それに、スペアを持っといて損はねぇだろ」

真耶視点
今日は、お昼から織斑先生のお願いで、大神君と一緒に買い物に来ていました。
大神君の話を聞いてから、どんな服を着るのか興味を持っていたんですが、どうやらカジュアルなものを好んで着るみたいです。
洋服を買い終えた後、私は何故か大神君に連れられて、ある場所へ向かいました。
その場所は・・・眼鏡売り場
視力の良い大神君が何故こんな場所に来たのか分からず、困惑していると
「これ、掛けてみろ」
そう言って、フレームを渡してくる大神君の様子は「一切の反論は許さねぇ」と言いたげな雰囲気でした。
こうなった彼を止めれるのは・・・織斑先生以外にいないでしょう。
そう思い、私は眼鏡を外してフレームを掛けました。
フレームを掛けた私を見て、大神君は何か感じたんでしょう。
私からフレームを取ると、別のフレームを渡してきて

それを掛けた私を見て、フレームを外して次のフレームを渡す。
それを２０分ほど行った時、最後に、私にスカイブルーのフルリムタイプのフレームを渡してきました。
そのフレームを掛けて大神君を見ると、決まったのか、店員さんを呼んでいました。
まさか・・・私に、買ってくれるのかな？
・・・どうやら、私の予想は当たってたみたいで
店員さんに連れられて私は視力を測り、新しい眼鏡を大神君に買ってもらうことになりました。

買い物を終えて帰るなか、私は大神君に声をかけました。
今日は、大神君の洋服を買いにきただけなのに・・・なんで私の眼鏡を買ってくれたんでしょう？
すると・・・彼は「礼だ」と言ってきました。
基本知識や基本動作を教えてくれたお礼だと。
私は先生なんですから、生徒に教えるのは当然です。
でも・・・
そう言いながら歩く大神君を見て、私は嬉しさがこみ上げてきました。
「スペアを持っといて、損はねぇだろ」
と言っていますが、その様子は何処か照れているような感じがして可愛く思えて
私は、前を歩く不器用な優しさをもった「狼」を見て笑みを浮かべた。

真人視点
山田との買い物から帰って、織斑に言われた寮の部屋で休んでいた時だった。
「大神、入るぞ」
そう言って、織斑は部屋の中に入ってきた。

「なんか用か？」
「お前のクラスが決定した」
クラスが決定した・・・その言葉を聞いて、俺はいよいよかと感じる。
ＩＳは、女にしか扱えないから・・・俺のいるこの学園は全寮制の女子校だ。
つまり・・・俺は人外魔境（女の巣窟）に足を踏み入れるということ。
「まぁ、そう構えるな。お前のクラスは私と山田君が担当するクラスだし、「世界で１人目」のＩＳを動かした男もそのクラスだ」
世界で１人目のＩＳを動かした男？
２人目は・・・俺か。
「そうか。それで、ソイツは？」
「私の弟・・・織斑一夏だ」
織斑一夏・・・そういえば、買い物に行った時に駅前のテレビで流れてた気がする。
「それと、お前とヴィルの事だが」
その一夏って奴の事を考えていると、織斑が話を切り替えてきた。
ＩＳ・・・それも個人専用の機体を持つには、企業や政府に就く必要があるらしい。
「ヴィルは、あの馬鹿が作った新しいテスト機、お前はそのテストパイロットという名目になった」
話をまとめるとこうだ。
ヴィルはＩＳの制作者・・・篠ノ乃束が作った新しい機体のプロトタイプ
それを、束の雑用をしてた俺が誤って機動させ、それどころか専用のパイロットとして登録された・・・という「設定」
更に、その束って奴は・・・ヴィルと俺に興味を持ったらしく、この穴だらけの裏工作（設定作り）に積極的に協力
今頃、テレビで大々的に放送されているだろうとの事。

・・・コイツは面倒な事に巻き込まれそうだな。ったく・・・

そして・・・これから1週間後

俺は、ＩＳ学園に入学して、面倒な事に次々と巻き込まれていった。

入学、そして出会い（前書き）

前回の前書きで言った通り、今回はアニメとコミックスを参考に作りました。
所々オリジナルの描写がありますがご容赦を。

ちなみに、主人公のイメージボイスは作者がファンのきーやん
イメージソングはＴＥＴＲＡ－ＦＡＮＧのＳｈｏｕｔ ｉｎ ｔｈｅ ｍｏｏｎｌｉｇｈｔです。

入学、そして出会い

俺は今、織斑に言われたクラス・・・ 1年1組に居るんだが・・・。
（ウザってぇ・・・）
絶賛、周りの女どもから見られている真っ最中だ。
後ろどころか、クラスメイトは1人除いて全員女・・・ とんだアウェーだよ畜生。
ちなみに、その1人ってのは俺の右隣に居る。
織斑一夏
コイツが、織斑の言ってた弟・・・ 世界で1人目のＩＳを動かしちまった不幸な男って奴か。
傷の舐め合いってのは嫌いだが、コイツは境遇が同じだし・・・ まぁ、仲良くなった方が得だろうな。

一夏視点
（これは・・・ 予想以上にキツい・・・）
どうしてこうなったのか、俺は甚だ疑問だ。
事の発端は、今から2ヶ月前。
中学3年、受験のまっただ中だった頃だ。
俺は、藍越学園を受験しようとしていた。
理由は、学費が安く、就職率も高かったから。
で、その学園を受験する為に受験会場の公共施設に行ったのは良いんだけど・・・ そこで迷った。
次に見つけたドアを開いて、違ったら会場の場所を聞こうと思っていた。
そう思っていたとき、一つのドアを見つけて・・・ 開いたのが、運の尽きだった。
試験管に通された先に置かれていた一台のＩＳ

それを、俺は起動させてしまったんだ。
試験の結果は・・・合格
俺は、姉・・・織斑千冬の手によって入学手続きを済まされ、今に至る。
だが・・・その千冬姉から、数日前に電話が来た。
内容は、たった一言。
「お前の入るクラスに、もう一人男子が入る事になった」
それだけ。
その千冬姉が言ったのが・・・俺の左隣に居る奴だろう。
染めたのか、地毛なのか分からない銀髪
学校指定の制服を来崩した・・・どこか不良っぽい・・・いや、完全に不良なんだろうな。
ソイツも、俺と同じで女子からの視線を浴び続けて・・・見るからに「イライラしてる」と言いたげな表情をしていた。

真人視点
(あぁ、ウザってぇ・・・暴れられたら、どんだけ楽だろうな)
女どもの視線にいい加減嫌気がさし始めた頃、教室のドアが開いて、見知った奴が入ってきた。
「皆さん入学おめでとう。私は、副担任の山田真耶です。これから1年間よろしくお願いしますね」
見知った奴・・・山田は、教卓の前に立つと自己紹介をしたが、クラスの反応は無言。
何処の通夜だと言いたいけど、それは抑えといた方が良いだろうな。
「え・・・と、今日から皆さんは、このＩＳ学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも、放課後も一緒です。仲良く助け合って、楽しい3年間にしましょうね？」
そう言って、山田は笑みを浮かべるが・・・リアクションは無かった。
「じゃ、じゃあ、自己紹介にしましょうね。えっと・・・出席番号

順で・・・」
この空気に堪えられなかったんだろうな。俺も現にキレる寸前だし。
山田の言葉によって、自己紹介が始まった。
「ん・・・？」
自己紹介を適当に聞きながら、教卓の前の山田を見ると・・・何処かが違った。
よく見ると、以前俺が買った眼鏡をかけているのが分かる。
へぇ・・・やっぱ、似合ってんな。
そんな事を考えている時だった。
「大神君。大神真人君！」
「あ？」
山田が、俺を呼んでいた。
俺が見ていたことに気がついたのか、その顔は仄かに赤い。
まぁ、ジッと顔を見られてたら恥ずいだろうし、あまり良い気分もしねぇだろうな。
「あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？でも、「あ」から始まって、今「お」なんだよね。自己紹介してくれるかな？だめかな？」
そう言って、俺を見てくる山田の目は少しばかり涙目になっていた。
多分、俺にしかとされてるとでも思ったんだろう。
「わーったよ・・・自己紹介すっから、んな面すんな」
「ほ、本当ですか？」
「あぁ」
こっちが悪者（ワルモン）みてぇだろうが・・・まぁ、不良だけどよ。
そう思いながら、俺は席から立ち上がる。
「大神真人、１７歳。何の因果かＩＳを起動させちまったばかりに、この学園に入る事になっちまった」
自己紹介を始めながら、後ろの奴にも俺の姿が見えるように振り返る。
周り・・・織斑一夏からも、視線を浴びる。

「嫌いなものは、人を見下す奴と居場所(ナワバリ)を荒らす奴。そんぐらいか」
そう言って、俺は席についた。
座る時に、周りの奴らを見てみたけど・・・全員がポカンとしていた。
「えと、大神君の次は・・・織斑君ですね」
俺の自己紹介を聞いて、少し困ったような笑みを浮かべながら、山田は織斑一夏・・・面倒くせぇ、一夏をみた。
「あ、はい！」
俺の自己紹介を聞いて呆けた面をしていた一夏は立ち上がった。
「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」
そう言って、織斑は黙った。
周りの女子どもは、「何か他に話す事はないのか？」と言いたげな目で一夏を見ている。
一夏は、困ったように左・・・窓際に居る女子を見るが、ソイツは目を逸らす
多分・・・知り合いなんだろうな。
今度は俺を見てきやがった・・・が、俺も目を逸らした。
自分(テメエ)の事なんだから、自分(テメエ)でなんとかしやがれ。
そうすると、自棄になったのか、それとも開き直ったのか・・・腹を括ったような表情をした。
さて・・・なんて言うんだろうな？
「以上です！」
・・・今なんつった？この馬鹿。
一気に拍子抜けしたのか、俺以外の全員が椅子からずり落ちていた。
（・・・コイツ、本当に織斑の弟か？）
そう考えながら一夏を見ていると、俺の前に、また見知った奴が現れた。
スパーン！
直後に聞こえたのは、スリッパなどで床を叩いたような良い音。
よく見ると、見知った奴・・・織斑は出席簿を持っていて、一夏は

頭を押さえていた。
さっきの音は、織斑が出席簿で一夏を叩いた音だったのか。
「げぇっ！関羽！」
スパーン！
「誰が三国志の英傑だ、この馬鹿者」
「織斑先生！」
（ったく・・・ようやくお出ましか）
「もう会議はよろしいんですか？」
「あぁ、クラスの挨拶を押し付けてすまないな。山田君」
「い、いえ。私副担任ですから」
織斑の言葉を聞いた山田は、顔を赤くする。
その様子は、憧れの人を見ているそれだ
織斑は、そんな山田を見ると、教卓の前に来た。
「では、自己紹介の続きを始めろ」
織斑の一言で、一夏以降の自己紹介が始まった。

一夏視点
俺の姉・・・織斑千冬は、第一世代ＩＳ操縦者の元日本代表。
現役時代、公式戦無敗の記録を残したまま引退
以後、その舞台から姿を消した。
その千冬姉が、なんでここにいるんだ？
職業不詳で、月に１，２回ほどしか帰ってこない実の姉が・・・。
「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を１年で使い物にするのが仕事だ」
教卓の前で、千冬姉がそう言った・・・その直後
『キャァァァァァァァァァ！』
「うぉっ！？」
周りの女子が黄色い悲鳴をあげた。
それに、俺は驚いたし・・・
「チッ・・・ウゼェ・・・」

俺の隣にいた大神は、舌打ちしていた。
「千冬様！本物の千冬様よ！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「私、お姉様の為なら死ねます！」
思い思いの言葉を口にする女子を見て、千冬姉は小さくため息を吐いた。
「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ・・・ 私のクラスにだけ集中させてるのか？」
「お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そして、つけあがらないように躾をして！」
千冬姉の呆れたような言葉に、女子が更にヒートアップする。
千冬姉が、俺の担任・・・？
そう思っていると、千冬姉は俺を睨んできた。
「で、まともに自己紹介も出来んのか？お前は」
「い、いや千冬姉。俺は・・・」
スパーン！
「学校では織斑先生と呼ばんか、この馬鹿者」
「は、はい・・・」
再び出席簿で叩かれた頭を押さえて踞ったまま、俺は返事をした。
「え？織斑君って、あの千冬様の弟？」
「それじゃ、男でＩＳを動かせるっていうのも、それが関係してるのかな・・・」
「じゃあ、大神君はどうなんだろう・・・」
頭を摩っていると、周りの女子が小声で俺と大神の事を話しているのが聞こえた。
「静かに！」
クラス中が、その話で盛り上がり始めた瞬間、千冬姉の一言でクラスは静かになった。
「諸君らには、これからＩＳの基礎知識を半年で覚えてもらう。そ

の後実習だが、基本動作は半月で体にしみ込ませろ。いいか？良いなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」
『はい！』
なんという鬼教官。
姉は、人の皮を被った悪魔だろうか。
いや・・・なまじ人間性能の限界を知ってる分、悪魔より質が悪い。
っていうか・・・教師してたのかよ。
心配した俺が馬鹿だった。
俺・・・この学校でやっていけるのか？

真人視点
「あの子達よ！世界で2人しかいないＩＳを動かせる男性って！」
「ねぇ、アナタ話しかけなさいよ！」
「私行っちゃおうかしら」
「待ってよ！まさか抜け駆けする気じゃないでしょうね！」
ＨＲが終わって休み時間
教師の前には、女どもが押し寄せて俺と一夏を見ていた。
俺たちは上野のパンダか？
ふと、一夏を見ると、グロッキーな面をしてやがった。
「なぁ」
「ん？」
俺が声をかけると、一夏は間抜けな面をしてこっちを見てきた。
「お前が織斑が言ってた弟か」
「え？千冬姉を知ってるのか？」
「一月前から学園に来てたからな。お前の姉貴には世話になった」
「そうなのか。自己紹介したけど、改めて・・・俺は織斑一夏、一夏で良いぞ。お前のこと、真人って呼んで良いか？」
「好きにしろ」
織斑の事を話すと、一夏は笑顔で俺を見てきた。

「ちょっと良いか？」
俺と一夏の話が一段落した頃、一人の女が俺たちの所に歩いてきた。
（コイツは・・・確か）
その女は、自己紹介の時に、一夏から目を逸らした女だった。
「コイツに用があるんだろ？」
俺が一夏を指差しながら言うと、女は小さく頷いた。
「そんじゃ、俺は退散すっからゆっくり話せよ」
そう言って、俺は一夏と女に軽く手を振って、クラスの前の女どもを掻き分けて屋上に向かった。

「まさか、俺を知らねぇ奴がいるのが此処までキツいもんとは思わなかったぜ・・・」
屋上に着いた俺は、制服からタバコを1本取り出して火をつける。
（ホント、此処は今までいた世界とは違うんだな・・・）
柄にもなく黄昏れている時だった。
「あれ、真人じゃねぇか」
屋上の扉が開く音が聞こえ、その方を向くと・・・一夏とさっきの女が居た。
「おぅ」
「って、タバコ吸ってんのかよ」
「癖になっちまったし、不良なら一度は経験するもんだ」
手短に一夏と会話すると、二人は俺から離れた場所で話し始めた。
話してる内容は分からねぇが、どうやら二人は知り合いみてぇだな。
そう思って、携帯灰皿に吸い殻を捨てると、俺は教室に戻るべく扉に向かった。
・・・っと、そうだ。
「覗き見は男の専売特許だぞ？」
屋上の影で二人を覗いていた数人にそう言って、俺は教室に戻った。

「では、ここまでで質問のある人～？」

授業が始まったけど・・・俺にとっては復習みてぇなものだった。
対して・・・
「っ・・・・・・・」
一夏は分かってねぇみたいだ。
「織斑君、何かありますか？」
「！えっと・・・」
「質問があったら聞いてくださいね？何せ私は先生ですから！」
たしか、入学前に資料が送られるって山田が言ってたけど・・・まさかコイツ・・・
「・・・先生」
「はい、織斑君！」
「ほとんど全部、分かりません・・・！」
その言葉に山田が困惑し、軽く呆れていると、織斑が一夏の方へ歩いていく。
「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」
「あの黒くて分厚いやつですか？」
「そうだ。」
「・・・古い電話帳と間違えて捨てました」
スパーン！
そのまさかだった・・・ある意味、期待を裏切らねぇ奴だなコイツ。
「後で再発行してやるから、1週間以内に覚えろ。良いな？」
「いや、1週間であの厚さはちょっと・・・」
「やれと言っている。分からない所は大神にでも聞け、同じ男子同士だ・・・聞きやすかろう」
織斑は、そう言いながら一夏を睨んだ直後に俺を見る
（馬鹿な弟が迷惑をかける）
（別に良いけどよ、織斑と山田が教えれば良いじゃねぇか）
（身内贔屓は流石に出来んよ）
（・・・わーったよ）
アイコンタクトで織斑と会話すると、俺は小さくため息を吐いて前

を見たら・・・山田がすこしむくれていた。

一夏視点

休み時間、俺は真人ににＩＳの基礎知識を教えてもらっていた。

「なぁ、このＰＩＣってのは何だ？」

「ＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）・・・正式には慣性制御装置。引力は分かるか？」

「あぁ・・・たしか、モノ同士が引き合う力の事だろ？」

「そうだ。それじゃ、慣性は？」

「えっと、たしか・・・」

「ちょっとよろしくて？」

その最中、一人の女子が俺たちに話しかけてきた。

「「あ？」」

俺は間の抜けたような返事

真人は女子に対して僅かに嫌悪感を含んだ返事をした。

「まぁ！なんですの、そのお返事！私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

うわ・・・出たよ。

正直、この手合いは苦手だ。

今の世の中、ＩＳのせいで女性はかなり優遇されている。

優遇どころか・・・もはや、女＝偉いの構図にまでなっている。

つまり・・・そういう、いかにも現代の女子が目の前に立っていた。

ふと、真人を見ると・・・

「・・・」

滅茶苦茶機嫌が悪そう・・・というより、この女子に対して嫌悪感を露にしていた。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「興味すらねぇな」

「なっ・・・私を知らない？！セシリア・オルコットを？！イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？！というより、興味

が無いとは、どういうことかしら？」
俺と真人の言葉に逆上した女子・・・ オルコットは、真人を睨んで話しかける。
「代表候補生だとか入試主席だとか、んなモンでエリートぶって他人を見下すようなド三流に興味がねぇって言ったんだよ。お山の大将気取りてぇんなら、猿山にでも行け」
・・・ 容赦ないな、真人。
「あの・・・ 代表候補生って何？」
「はぁ・・・ 代表候補生ってのは、国家代表ＩＳ操縦者の候補生・・・ 単純に言えば、野球チームの２軍みてぇなもんだ」
「あぁ、なるほど」
「２軍つっても、相応の知識と技能が必要になるから選ばれた奴しかなれねぇ・・・ いわばエリートなんだが・・・」
俺の質問に、呆れて説明する真人の話を聞いて、俺は代表候補生が何なのか漸く分かった。
で・・・ その真人は、オルコットと絶賛メンチを切り合ってます。
「貴方、私を馬鹿にしてますの？」
「馬鹿にする価値がテメェにあると思ってんのか？」
「くっ・・・ ここまで侮辱されるのは初めてですわ」
「ハッ、そいつは光栄だ」
怒りを堪えながら睨むオルコットと、それを躱しながら、オルコットを鼻で笑う真人。
・・・ 真人と喧嘩したら、勝てる気がしないな。
「ふん、まぁでも？このぐらいの屈辱は甘受してさしあげます。私は優秀ですから、貴方がたのような人間にも優しくしてさしあげますわよ？分からない事があれば、まぁ、泣いて頼まれたら教えてさしあげても良くってよ？何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
「あれ？俺も倒したぞ、教官」
「はぁ！？」

俺がそう言うと、オルコットは驚いたような表情をした。
「倒したっていうか・・・いきなり突っ込んできたのを躱したら、壁にぶつかって動かなくなったんだけど」
「私だけと聞きましたが・・・」
「女子ではってオチじゃないのか？」
次の授業の準備をしながら話すと、ワナワナと震えながらオルコットは俺に顔を寄せてきた。
「貴方！貴方も教官を倒したっていうの？！」
「お、落ち着けって・・・」
「貴方は？！」
俺がなだめようとしていると、オルコットは視線を真人に移動させる。
「完敗したけど、それがどうした？その程度で図に乗るんなら、やっぱり三流だろ」
「くっ・・・」
真人の言葉で、二人の雰囲気は更に険悪なものになっていく
・・・正直、凄く胃が痛い。
そう思っていると、予鈴が鳴ってオルコットは席へと戻っていった。
「なぁ」
「あ？」
「真人が戦った教官って、誰なんだ？」
「・・・クラスの奴は全員知ってる奴、と言っとく」
オルコットの事で、よほどイライラしてたんだろうな。
真人は、それだけ言って溜め息を吐いた。

真人視点
ド三流・・・オルコットとのくだらねぇ言い争いをした日の放課後、一夏と知り合いの女・・・篠ノ乃箒だったか。
その2人が同じ部屋になったりと、ドタバタが起きたが・・・そこは割愛しとく。

場所は学校
今は3時間目だ。
「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など、まぁクラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」
学級委員ねぇ・・・柄じゃねぇな、面倒くせぇし。
「はい、織斑君を推薦します」
「私も、それが良いと思います」
「私は、大神君を推薦します」
一夏か・・・まぁ、無難じゃねぇの
・・・つか、最後に俺を推薦した奴あとで面貸せ。体育館裏で話し合う必要がありそうだ。
「お、俺？！」
一夏は、自分が推薦された事に漸く気がついたのか。
今度から馬夏って呼び方変えるか？
「他にはいないのか？居ないなら、この二人で多数決を取るぞ？」
待て、織斑。
俺は絶対にクラス代表とか面倒なのやりたくねぇぞ。
「納得出来ませんわ！」
そんな事を考えていると、聞いてるだけでムカつく声がした。
後ろを振り向くと・・・あのド三流、オルコットが立っていた。
「そのような選出は認められません！男がクラス代表なんて、いい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと仰るのですか？！だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては堪え難い苦痛で・・・！」
「イギリスだって・・・「黙れよ、ボス猿気取りのド三流が」」
オルコットの言葉に、一夏が反論しようとしたが・・・割り込んできた俺の言葉に二人とも黙った。

・・・流石に、ここまで三流・・・いや、四流の奴だったとはな。
「三流とばっかり思ってたけど・・・それ以下だな、お前。それに、テメェの国も大した自慢ねぇだろうが」
「だな。世界一まずい料理で、何年覇者だよ？」
「貴方方・・・私の祖国を侮辱しますの？」
「国のことなんざどうでも良いけど、先に侮辱してきたのはテメェだ」
「昔から言うだろ？やられたらやり返せって」
そう言って、俺と一夏・・・そしてオルコットが睨み合う。
「決闘ですわ！」
「あぁ良いぜ。四の五の言うより分かりやすい」
「決闘とか、お前みたいな四流が使っていい言葉じゃねぇが・・・売られた喧嘩は買うぜ」
「わざと負けたりしたら、私の小間使い・・・いえ、奴隷にしますわよ！」
「ハンデはどのくらいつける？」
オルコットの決闘・・・いや、三流（ガキ）の喧嘩宣言に乗ったが、一夏の言葉の意味に気づいた俺は溜め息をついた。
「一夏・・・ＩＳ動かした時間が短い奴が、経験多い奴にハンデつけてどうすんだよ」
「織斑君、それ本気で言ってるの？」
「男が強かったなんて、ＩＳが出来る前の話だよ？」
「もし男と女が戦争したら、３日もたないって言われてるよ？」
俺の言葉に、漸く意味が分かったのか・・・周りの女子が笑い出す。
「テメェらも五月蝿ぇぞ。言ったよな？俺は他人を見下す奴が嫌いだって・・・潰すぞ？」
その様子に一夏はたじろぐが・・・周りの女子の反応に、思いっきりドスを利かせて言いながら睨んだ。
「大神、少し落ち着け。お前達も静かにしろ！」
その様子に、周り（一夏含む）は寒気を感じたように身を縮こませ

るが、織斑の言葉で全員静かになる。
「話はまとまったな？勝負は次の月曜、第３アリーナで行う。織斑とオルコット、大神はそれぞれ準備しておくように。あぁ・・・それとオルコット」
織斑が喧嘩の日時と場所を言うと、俺を一瞥した後でオルコットを見る。
「大神を甘く見ると、足下を掬われるぞ？」
何故なら・・・そういって、織斑の言った言葉で、クラスは余計騒がしくなった。
「何故なら、大神はＩＳの使い方を覚えて１ヶ月で、私に一撃を入れた男だからな」

クラス代表決定戦（前書き）

相も変わらずグダグダですみません。

クラス代表決定戦

三流（オルコット）との喧嘩宣言があった後、色々なことがあった。
一夏の専用機がデータ収集の目的で支給されることが分かったり
篠ノ乃が、篠ノ乃束の妹である事が分かった・・・ま、名字から見たら分かるか。
あとは、授業中、ＩＳと操縦者の関係性の話になった時、山田が俺を見て赤くなったり・・・つか、なんで俺を見るんだよ。
その後、織斑に言われてヴィルを山田に預けたり・・・
まぁ、後も色々あったが・・・その辺は端折るわ。
そんで、今は放課後
何故か、俺は一夏と篠ノ乃と剣道場に居た。
そういや、一夏は一時期剣道してたって織斑が言ってたな
「どういう事だ・・・」
「いや、どうって言われても・・・」
「どうしてそこまで弱くなっている？中学校は何部だった？」
「帰宅部。３年連続皆勤賞だ！」
「鍛え直す。これから毎日、放課後３時間。私が稽古をつけてやる！」
手合わせが終わって、床に座っている一夏を見て、篠ノ乃は言った。
まぁ、こりゃＩＳ以前の問題だし・・・無駄にならねぇしな。
「ちょっと待て！俺はＩＳの事を・・・」
「一夏。篠ノ乃のやり方は正しいぜ」
反論しようとした一夏を見かねて、俺は口を出す。
「ＩＳってのはパワードスーツ・・・結局、動かすのは体を動かすのと同じだ。お前は、ＩＳの使い方以前に体の使い方を覚えた方が良いぜ。３年間皆勤賞なんて、ほとんど運動してねぇもんだしな」
そう言いながら、俺は立ち上がって、篠ノ乃の横・・・一夏と向か

い合うように立つ。
「ま、剣道一つってのも味気ねぇだろ。教えてやるよ・・・不良(オレ)の体の動かし方って奴を」
そう言って、俺は口元を歪めて笑った。

篇視点
私は、一夏と大神から少し離れた場所で、二人を見ていた。
大神の言う「不良の体の動かし方」というのが気になるが・・・。
「どっからでも来いよ」
そう言う大神の構えは・・・立っているだけ
対して、一夏は竹刀を正眼に構えている。
暫く二人は向かい合ったまま動かなかったが・・・一夏が動いた。
「・・・フッ！」
間合いを詰めて、上段から竹刀を振り下ろす。
だが・・・
「真正面からぶつかってくんな」
「！」
大神は、そう言いながら間合いを詰め、一夏の両腕を右腕で受け止め・・・がら空きだった右脇腹に拳を入れた。
「ぐっ！」
「それなりの経験あったみてぇだけど・・・喧嘩にルールはねぇんだぜ？」
防具の上からでも衝撃があったんだろう。
拳による痛みで動きが一瞬止まった一夏の顔面に、大神は左の拳を叩き込んだ。
「一夏。不良（俺）の拳には型も考えもねぇ。単純に、相手を蹴って殴る・・・そんだけだ。剣道みてぇに竹刀使って戦う訳じゃねぇってのは覚えとけ」
そう言う一夏は、竹刀を再び正眼に構える。
「もう一度言うが、俺が教えるのは闘い方じゃねぇ。体ってのは・・

・こういう使い方もあるってのだけだ」
お前も、喧嘩したことあるなら分かるだろ？
大神はそう言って、一夏の突きを躱して顔に蹴りを入れた。

真人視点
「生きてるか？」
「なんとかな・・・」
手合わせ・・・と言えるもんじゃねぇが、それが終わった後、俺と一夏は更衣室で話していた。
俺は無傷なんだが・・・一夏は、俺の拳や蹴りでボロボロだ。
「なぁ、真人」
「あ？」
一夏に呼ばれた俺は、制服の上着を羽織って一夏に向き直る。
「お前、千冬姉と戦ったんだよな」
「おぅ」
「・・・どうだった？」
「強かったぜ。俺が負けた奴は、マジで強かった。力もそうだけど、ココがな」
一夏の真剣な質問に、俺は自分の胸を指差して答えた。
「信念（なかみ）をしっかり持ってて、そのために全力を尽くしてた。昔の俺には、眩しいくらいにな」
そう言って、俺は自嘲する。
「昔のって・・・今のお前はどうなんだよ？」
一夏の言葉に、俺は自嘲を止め、口元を歪めて笑う。
「あるぜ・・・居場所（ナワバリ）を守る。それが、俺の持ってる信念（なかみ）だ」

それから・・・1週間が経ち、俺と一夏、篠ノ乃は第3アリーナのピットに居た。
「ありがとうな、真人、箒」
そう言って、一夏は俺と篠ノ乃を見る。

この1週間、俺は基本知識と俺なりの体の動かし方
篠ノ乃は、剣道による基礎訓練をやった。
「気にすんな。ダチの世話を見るのはダチの勤めだ」
そう言っていたその時。
「織斑君！織斑君！」
俺たちの居るピットに、山田の声が響いた。
「来ました！織斑君の専用ＩＳ！」
「織斑、お前は最適化をしろ。大神はすぐに準備だ」
スピーカーから織斑の言葉が聞こえた直後、横の格納庫のドアが開いていく。
開くドアの先にあったのは・・・ 1台のＩＳと、一匹の機械の狼
「じゃ、行くか・・・ 起きろ、フローズヴィトニル」
ＩＳを見ている一夏と篠ノ乃を横目に俺が呟くと、機械の狼・・・ヴィルが立ち上がる。
「え？！」
「それが・・・ お前のＩＳなのか？」
「あぁ」
二人は、ヴィルを見て驚いている。
まぁ、無理もねぇだろうな・・・ ＩＳが動物の形してるなんて、コイツくらいだろ。
『どうやら、面倒事に首を突っ込んだようだな』
「嫌いな奴が居たからな・・・ それに、アイツには絶対に負けてやれねぇ」
『なるほど・・・ 要は、ソイツの驕りを噛み砕く・・・ という訳か』
「そういう事だ。行こうぜ」
『フ・・・ 了解だ主』
そう言って、俺たちはカタパルトを歩いてゲートに向かった。

一夏視点
「あれが・・・ 真人のＩＳ・・・」

俺は、射出ゲートを歩いていく真人の背中を見ていた。
その隣には、銀色の機械仕掛けの狼
真人はフローズヴィトニルって言ってたっけ・・・。
『うわっ！？』
射出ゲートの先に到着した直後、真人は銀色の光に包まれた。
その光は強く、俺と箒にも届いて、二人して光を腕で遮った。
「え・・・・？」
光が治まり、腕を降ろした俺の視線の先に・・・ 真人は居なかった。
身長は、３ｍくらいだろうか？
全身を覆う銀色の装甲
背中には、たてがみのようなスラスター
手には、簡単にモノを引き裂けそうな鋭い爪
そして・・・ 顔は、狼を模した銀色の装甲に守られている。
その姿は・・・ まるで
「狼男・・・」

真人視点
ゲートでヴィルを展開して上空へ向かうと、オルコットが驚いた表情で俺を見ていた。
オルコットだけじゃねぇ。
アリーナで観戦しているクラスの奴ら全員が、俺の姿をみて唖然としている。
「なんですの、そのＩＳは・・・ 全身装甲（フルアーマー）なんて、今まで見た事ありませんわ！」
「そうかい」
オルコットの言葉を受け流しながら、俺は目の前にウィンドウ表示された機体のデータに目を通す。
オルコットのＩＳ・・・ ブルー・ティアーズは遠距離射撃型
俺が攻撃するには、近くに寄るか
遠距離からの攻撃を当てるしか無い。

「まぁ、相手が誰であろうと勝つだけですわ・・・。今此所で、泣いて謝るというのなら、許してあげない事もなくってよ？」
オルコットは、余裕を取り戻して俺を見ながら話す。
「悪いが・・・ソイツはお断りだ」
『空気圧縮開始』
俺がそう言うと、ヴィルは背部のスラスターから大気を吸収し始める。
「それなら・・・お別れですわね。さぁ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」
そう言って、オルコットは手に持った銃を構え、引き金を引いた。
『大気圧縮率１００％・・・来るぞ！』
『分かってるっての！』
銃口から放たれたビームを躱すのを見たオルコットは、今度は連続して引き金を引く。
『主、奴の弾速は把握した』
『だったら・・・一気に突っ込む！』
ヴィルの言葉を聞くと、俺は加速してオルコットに向かった。
近づかせねぇようにオルコットは銃を連射するが、俺はそれを躱し、腕で受け止めながら突き進む。
「くっ・・・でしたら、これでどうかしら！」
オルコットと次第に距離を詰めていくと、奴のスラスターのパーツが四つ分離
それぞれがビームを出してきた。
『んだよ、アレ！？』
『ビット兵器・・・遠隔操作で、複数のビットを動かして敵を攻撃するものだ』
奴の動かしたビットから複数のビームをギリギリ躱しながら、俺は内心舌打ちをした。
内心焦ってるうちに、背後からビームが発射された瞬間・・・ヴィルが勝手に動いた。

『？！』
『主、相手は主の死角を狙ってくる。そこは私が補うから、主はオルコットに集中しろ』
『つまり・・・背中を預け合うってことか・・・面白ぇ！』

千冬視点
私は、第3アリーナの管制室で大神の戦闘を見ていた。
「すごいです・・・。オルコットさんの攻撃を、全て躱してる！」
同じく、モニタリングしながら観戦している山田君が驚きに満ちた声を発するが・・・。
「確かに・・・大神とヴィルは凄いな」
「？」
私の言葉に疑問を感じたのか、山田君は私を見てきた。
「前方からの攻撃は大神、後方の攻撃はヴィルが対応しているんだろう。それが、どういうことか分かるか？」
大神の戦闘を見ていると、背後からの攻撃を躱す際に不自然な動きが見られる
自分で動いているというより、機体に引っ張られているような動きが。
「つまり・・・背中を預け合っている・・・って事ですか？」
「恐らくな」
山田君の質問に、そう答えて私はモニターを見た。
そこに写っていたのは・・・大神とヴィルがビットを全て破壊した映像だった。

真人視点
「オラァッ！」
俺の繰り出した拳で、最後のビットを破壊。
残存しているシールドエネルギーは半分を切っていた。
（残りは・・・奴だけだ！）

俺は、一気に加速してオルコットに接近していった。
迎撃のため、オルコットは銃を連射するが、それを全て交い潜って躱す。
「一気に詰めて、殴り飛ばす！」
「・・・かかりましたわね？四機だけではありませんのよ！」
オルコットがそう言った瞬間、腰の装甲が動いた。
その先は砲門になっていて、そこならミサイルが放たれる。
『ミサイル・・・それも、追尾性能付きか』
『関係ねぇ！』
『まったく・・・主は血の気が多い。良いだろう！圧縮空気、解放！』
俺は、放たれたミサイルに向かって一直線に飛び・・・交差する瞬間に音速を超えた。
音速を超えた瞬間に発生した衝撃波によって、ミサイルは爆発。
辺りは爆煙に包まれた。
「これで終わりですわね」
「馬鹿が、その言葉は・・・死亡フラグだぜ？」
爆煙を見て、緊張を解いたオルコットの背後で、ヴィルは再び空気を圧縮。
ハイパーセンサーで感知して、オルコットが俺に銃を向けるが遅い。
その銃身を左手で掴んで上に向けさせ、圧縮した空気を炸薬代わりに勢いの増した俺の拳はオルコットに突き刺さった。
「ぐぅっ・・・！」
地面に向かって落下するが、途中で急制動を掛け、俺を迎撃してくる。
だが、こっからは俺のターンだ。
ビームを躱して懐に潜り込み、俺に向けようとする銃身は腕や足で抑え
がら空きになったボディを蹴り、殴る。

「不良（クズ）に攻撃される気分はどうだ？エリート様よ」
「最悪・・・ですわ！」
軽口を叩く俺に、オルコットは銃を連射するが・・・当たってやるつもりはねぇ。
「テメェは、俺に負ける」
「貴方のような野蛮人に負けるなど、あり得ませんわ！」
オルコットは、俺の言葉に耳を貸そうとしてねぇが、俺は話し続ける。
「多くの努力をしたんだろうな・・・親の残した大事なものを守る為に」
「！」
俺がそう言った瞬間、オルコットは攻撃の手を緩める。
「悪ぃが、調べさせてもらった。テメェと俺は・・・境遇が似てる・・・同族嫌悪って奴だ」
俺は、装甲の下でオルコットを睨みながら拳を握る。
「俺も、昔は自分が偉いと思ってた。だから、オルコット・・・自分（メェ）は偉いと思ってるお前が嫌いだ（テ）」
攻撃が止まった瞬間、俺は一気に懐に潜り込み、拳を振り上げる。
「誇り（プライド）を捨てろなんざ言わねぇ。だが・・・その驕り（プライド）は噛み砕かせてもらうぜ」
そう言って・・・俺は無防備なオルコットに拳を叩き込んだ。
「その下らねぇモンを捨てて、地面に立ってみろ。そん時、テメェは良い女になる」
その言葉の直後・・・俺の勝利は決定した。

セシリア視点
あり得なかった。
私が・・・セシリア・オルコットが負けるなど、あってはいけなかった。
幼い頃に両親が事故で死に、残されたのは、二人が残した莫大な遺産

それに群がる亡者たちから・・・二人の残したものを守るため、ありとあらゆることを勉強した。
ＩＳ適性テストでＡ＋を出した私は、政府の出した好条件を呑んで、イギリスの代表候補生となった。
その私が・・・此所で負ける。
相手は・・・私を侮辱し、挙げ句三流とまで言った野蛮な男
でも・・・彼の言葉が胸に深く突き刺さる。
『似た境遇』
それが意味することは分からないけど・・・言えるのは一つ。
彼も私も・・・幼い頃に親を失い、何時しか他人を見下すようになっていたこと。
『その下らねぇモン捨てて、地面に立ってみろ。そん時、テメェは良い女になる』
・・・あぁ、そうか。
そういう事だったのか。
『エリートだろうが、それを鼻にかけずに周りと対等に接しろ』
そう言いたかったのですわね。
まったく・・・不器用な方。

真人視点
俺の判定が終わった後、オルコットは俺を一瞥した後、ピットに戻っていった。
その直後に出てきたのは、最適化が終わった一夏
「へぇ、それがお前のＩＳか」
「あぁ、白式（びゃくしき）って言うんだ」
手短に話し終えると、俺と一夏は向かい合う。
「・・・お前の戦闘、見たぜ」
「そうか」
「此所が凄く熱くなった。拳って、傷つけるだけじゃないんだな」
一夏の言葉を聞いて、俺は笑みを浮かべた。

「たりめーだ。信念(なかみ)が詰まってる奴の拳ってのは、相手に思いを伝えることも出来んだぜ？」
「ハハッそうか」
そう言うと、一夏は拳を握って構える。
「へぇ・・・俺に拳で勝負するってのか？」
「真人の影響だ」
俺の言葉に答える一夏を見て、俺は笑みを深いものにする。
「俺の拳に信念(なかみ)が詰まってるか、見てくれよ」
「上等だ。かかって来い」
その言葉を引き金に
俺と一夏の喧嘩(かたりあい)が始まった。

結果は・・・意外にも引き分け。
一夏のヤツ、いつの間にか喧嘩強くなってやがった。
・・・で、その一夏と俺はと言うと。
「ＩＳを起動させているのに、拳で殴り合うとはどういう事だ？」
織斑と山田の説教を聞いていた。
「すみません」
「大神君、聞いているんですか！」
一夏は織斑に土下座し、俺は話しを受け流す。
「まったく・・・今後、ＩＳでこのような事をしたら反省文２００枚だ。わかったな？」
「はい・・・」
「大神君、良いですね！」
「わーったって・・・」
こうして、俺たちのクラス代表決定戦は幕を閉じた。
・・・ちなみに、俺は昔の俺に似た馬鹿(オルコット)を殴りたかっただけなので代表を辞退。
結局、１組の代表は一夏になったのだった。

キャラクター設定

大神真人
１７歳
身長１８０ｃｍ
体重５６ｋｇ
在籍ＩＳ学園１年１組
専用機フローズヴィトニル

本編の主人公
１７歳の春、不良と喧嘩の末にナイフで刺され死亡、ＩＳの世界で蘇生
元国語教諭の父と、元その生徒で不良だった母の間に生まれるが、８歳の頃に死別
以降は隣に住んでいた幼なじみの家で反居候生活をする事に。
小学校時代、それを切っ掛けにガキ大将と喧嘩し、不良の道を辿っていく。
今まで最多で３０対１の喧嘩で圧勝しており、当時は地元だけでなく近隣の県で「銀狼」「フローズヴィトニル」と呼ばれ、恐れられていた経歴を持つ。
高校１年生の頃、当時の生徒会長に「強い」とは何かを説かれ、自分にとっての強さ＝「自分の居場所（ナワバリ）を守る」と結論づける。
それ以降は、当初は野犬のように荒々しい性格だったが、次第に丸くなっていき、現在に至る。
成績に関しては、不真面目に受けていた分低いが、決して頭が悪いとは言えず、本気を出せば学年トップを目指せるほどの知能を持つ。
恋愛については知識はあるものの、周りに居たのが血の気の多い男ばかり、幼なじみは女を捨てたような奴だったので、人を好きにな

るという感覚が分からない状況。

イメージボイスは谷山紀章
キャラクターイメージは、「シュガーレス」の椎葉岳を銀髪にしただけ

フローズヴィトニル
待機状態　獣型、装飾型
第四世代（？）
コアナンバー　ＥＸ

主人公が「別世界での蘇生」を選んだ際に渡された主人公専用の機体。
既存するＩＳとは違い、全身装甲（フルアーマー）使用となっており、展開した姿は狼男そのもの。
スラスターと空気圧縮・放出による高機動と近距離戦に最も長けた機体で、他のＩＳと最も違う点は「自分で考え、行動する」という機械というよりも、生物としての「個」を持つ。
使用者登録された主人公と当初は「認めない」という理由で初期化・最適化を拒んでいたが、内に秘める思いを認め
本当の意味での「主従関係（パートナー）」となる。

外見のイメージは「舞ーＨｉＭＥ」のデュラン
イメージボイスは森川智之

武装一覧
狼牙（ウルフファング）　近接格闘武器。柄尻に狼の刻印が刻まれており、刃は波状。
イメージはガルルセイバーを参照。
狩猟する狼　通常時はクローズされている６機の小型の自立行動兵

器。機体操作はヴィルが対処するので、操作をしながらの行動が可能。

名称未確定　圧縮空気した空気を用いて実弾を放つ、所謂空気砲・・・だが、実弾を飛ばす為に必要な空気を溜めるまでに時間がかかるデメリットがある。元ネタはスウェーデンのとある製薬会社の化学実験室で行われたイタズラ

暴風加速　背部にある吸気口から大量の空気を吸収・圧縮し、スラスターの推進力に上乗せする形で解放することで、一時的に爆発的に加速。元ネタは瞬時加速だが「コレって、二度手間じゃね？」という短絡的な発想から。穴だらけなのは作者の頭足らず故。

その他、武装や単一仕様能力については考案中なのですが、アイデアを頂けたらな、と思います。

クラス代表決定、そして和解（前書き）

今回の話しで、主人公がフラグを立て・・・るのかな？
一応、４人くらいを予定してますが

クラス代表決定、そして和解

クラス代表決定戦が行われた翌日・・・。
「・・・という訳で、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいいですね」
一夏はクラス代表に選ばれた。
「あの、先生。なんで俺が代表に？」
「俺が辞退したからだ」
一夏が手を挙げて山田に質問するが、俺が質問に答えた。
「俺は売られた喧嘩を買っただけで、クラス代表に興味はねぇ・・・それに、お前は俺と違ってＩＳを動かした時間が短すぎる。それを代表戦に参加する事で補えるんだぜ？」
「でも、真人だって1ヶ月だろ？それなら・・・」
「ったく・・・学級委員みてぇな役職はガラじゃねぇんだよ。今まで、んな事に関わったことすらねぇしな」
俺の言葉に言葉を返してくる一夏を見ると、小さく溜め息を吐いた。
「そこまでにしておけ。大神は1ヶ月しかＩＳを動かしていないが、その内容の濃さが違う。お前が追いつくには、代表戦などに出る事が一番の近道という事だ」
俺と一夏の話しを聞いていた織斑が言った言葉で、一夏は黙ってしまう。
「このご時世だ。お前が居場所（ナワバリ）を守るには力が要る・・・力がねぇ奴が言う言葉ほど、脆いもんはねぇぞ？」
「・・・分かった」
俺の言葉に思う所があったのか・・・一夏は、クラス代表を引き受ける事になった。

ＳＨＲから時間が経ち、実技講習では一夏とオルコット、俺の3人がＩＳの基本演習を行い

急降下と急停止の演習中に一夏が頭からグラウンドに突っ込んで、
デカいクレーターを造った事で、織斑に怒られた。
呆れて溜め息をつきながら一夏を見ていたんだが・・・。
オルコットが、何故か俺をチラチラと見ていた。

そんな事があった放課後・・・俺は、屋上でタバコを吸っていた。
思い出したのは・・・オルコットとの闘いだ。
あの時、俺は柄にもなく説教をかました。
（ハッ・・・不良の俺が、誰かに説教なんてな。ガラじゃねぇ）
気に入らねぇ奴はぶん殴る。
昔の俺は、それだけで良かったんだが・・・あの生徒会長（いけすかねぇやつ）に会って
変わって
此処に来て・・・それに拍車がかかっちまったみてぇだ。
「あの・・・」
タバコを吸い終え、携帯灰皿に吸い殻を捨てた時、後ろから声をか
けられた。
「テメェか・・・何の用だ？」
俺の後ろに居たのは・・・オルコットだった。
オルコットは、俺の声を聞くと
「えっと・・・」と小さく呟いて俯く。
「・・・」
俺は、待った。
コイツが俺に何を伝えようとしているのか・・・それを聞く為に。
やがて、オルコットは俺に向かって頭を下げてきた。
「ごめんなさい」
「・・・どういう風の吹き回しだ？」
「貴方と戦って、気づかされましたわ・・・私は、自分の「代表候
補生」という地位を鼻にかけ、周りの人を見下していた・・・傲慢
だった事に」
そう言って、オルコットは頭を上げて俺を見る。

コイツは・・・親の残したものを守るために今まで努力してきて、それを奪われねぇように勝ち続けてきたんだったな。
だが、その過程でコイツは・・・周りを見下すようになっちまった。
「・・・頭良いから、あの時の俺の言葉で分かってんだろうが・・・俺も、お前と同じで親がいねぇ」
ジッと俺を見るオルコットを見て、俺は溜め息を吐いて話し始めた。
「二人とも事故で死んで、そっからは隣に住んでた幼なじみの家で半居候生活が始まった」
そう言って、俺は再びタバコを1本取り出して火をつける。
「けど・・・その日から、俺はいじめのターゲットにされた。いじめってのは、俺らみてぇな親のいない奴や気弱な奴がターゲットになりやすいってのは、分かるだろ？」
俺の言葉に、オルコットは黙って小さく頷く。
それを見て、俺は話しを続けた。
「仲の良かった奴らからいじめられるわ、先公は黙って見てるだけだわ・・・最悪だったぜ。そん時、俺は思ったんだ・・・「弱いからいじめられるんなら、そいつらより強くなれば良い。弱くねぇって証明すればいい」って。それで、ガキ大将を殴った」
その一言に、オルコットは息をのむ。
「そっからは・・・喧嘩の毎日だった。相手が誰であろうと、絡んでくる奴は殴ってきた。その結果・・・俺の周りには、俺を倒そうとする馬鹿ばかりになってた」
そう言って、一旦俺は言葉を止めてオルコットを見る。
吸い終えた吸い殻を携帯灰皿に捨てると、俺は再び話し始めた。
「そうしてるうちに・・・「俺は強い。俺は周りの奴とは違う」って見下すようになってた」
「・・・似てますわね」
「その差は雲泥だけどな」
俺は、そう言って上を見上げた。
空はオレンジ色に染まり、雲は一つもなかった。

「けど・・・その俺を真っ向から否定して・・・俺を喧嘩で負かした奴が居た」
「その方は・・・？」
「前の学校の生徒会長でな・・・俺の拳には、何も籠ってないって言われた。そりゃそうだよな・・・俺は、自分が強い事を証明したいだけで拳を振るってた・・・それ以外に意味が無かったんだからよ」
そう言って自虐的に笑う俺を、オルコットは黙って見ていた。
「俺は、他の奴らみてぇに、ソイツも不良＝クズと考えてるって思ってたんだが・・・」
「・・・だが？」
俺は、一旦言葉を区切り、アイツの事を思い出して笑い出す。
「ソイツは、「生徒が道を間違えねぇように拳を振るってる」って言ったんだよ。つまり・・・アイツは、俺ら不良をクズと思ってなかった。自分たちと同じ学校の生徒だって言いやがった」
「凄い方ですわね・・・」
「あぁ・・・俺は思ったよ、【馬鹿（つよい）】ってな・・・。それで、聞いた・・・【どうしたら強くなれる？】って。」
「その方は・・・なんと仰ったのですか？」
「【強さは人それぞれ。だが、大切なものや人・・・居場所（ナワバリ）を守りたいと思った時、人は今以上の力を出すそうだ】だってよ・・・」
俺の言葉に、オルコットは考えるように少し俯いた。
「お前のその思いってのも、立派な強さだし、誇りだと思うけどよ・・・それだけの為に生きるってのは、つまんなくねぇか？」
「・・・私にも、その【居場所（ナワバリ）】というものが見つかるでしょうか？」
「さぁな・・・これからのお前次第だろ」
そう言うと、俺はオルコットの横を通り過ぎて屋上のドアの前に立った。
「まぁ・・・」

小さく呟き、再び空を見ると・・・俺はオルコットを見た。
「自分(テメェ)の周りをもっとみてみろ。お前は近くを見すぎてんだよ」
それだけ伝えると、俺は教室に戻っていった。

セシリア視点
昨日のクラス代表決定戦から、彼の言葉がずっと胸の奥で響いていたけど・・・今日の言葉も、胸の奥深くで響いた。
『自分の周りをもっとみてみろ。お前は近くを見過ぎてんだよ』
彼の言葉が、なぜこうも容易く胸の中に浸透していくのか分からない。
けれど・・・私はようやく気づいた。
私と彼は、深い所で同じだったんだ。
親の死によって「弱い立場」になり、そして、今まで「自分の力を証明するために生きてきた」。
でも・・・彼は、そんな自分を変えてくれる方に出会った。
そして・・・私も、今までの自分を変えた方に出会った。
本当に・・・不思議な方。
初めて出会った時は、あんなに嫌いで、見るのも嫌だと思っていたのに・・・。
今は、彼の事が知りたくてたまらない。
彼が見ているものを、自分も見てみたいと思ってしまう。
こんな気持ち・・・今までで初めてですわ。

就任パーティーと新入生（前書き）

今回は・・・いや、今回も？
キャラ崩壊（？）している人が何人かいます。
深いに感じたらすみません。

就任パーティーと新入生

オルコットと話をして教室に戻った時、女子から「夕食後にちょっと付き合って」と頼まれた。
で・・・言われた通りに飯を食った後、着替えるために部屋に戻ったが・・・
ふと、部屋に掛けてある学ランに目を留めた。
（そういや、入学してから一回も着てねぇな）
何故か、久しぶりに着てみたいと思い、俺は学ランに袖を通し、食堂に降りた。
「お、真・・・人」
食堂に入ると、俺に気づいた一夏が声をかけてくるが・・・俺を見て黙っちまった。
「なんだよ、んなすっとぼけた面して」
「いや・・・その学ランって・・・」
「あぁ、前の学校の制服だ。で、どうした？」
「いや、なんつーか・・・様になってるな」
俺の格好を見て、一夏は呟いた。
俺の格好は・・・学ランのボタンは一つも締めず、下に着ているTシャツが見え
ズボンのポケットからベルトを通す穴に、ウォレットチェーンに姿を変えたヴィルを通している。
分かりやすく言うと・・・不良のそれだ。
「織斑君、どうしたの？」
「おぉ！大神君、凄い格好してるねー」
「なんと言うか、様になってるよ！」
俺と一夏の会話が気になったのか、クラスの女子が数人寄って来て、思い思いに俺の格好についての感想を言ってくる。
「様になってるっつーか、現役で不良だからな？」

怖がるどころか、そう言って笑ってる女子に、念のために言っておく。
「大神、漸く来たか」
「あ、その制服・・・」
そうやっていると、後ろから声がかけられた。
まぁ、誰か分かってんだが・・・振り返った先には、織斑と山田が居た。
「久しぶりに着たくなったんだよ」
「そうか。その姿を見るのも懐かしいな」
「そうですね・・・」
山田の質問に返事を返すと、織斑がそんな事を言ってきた。
・・・此処に来て1ヶ月経つんだったな。
「さて、大神君と先生達も来たことだし・・・『織斑君、クラス代表就任おめでとう!』」
女子のその言葉から・・・一夏のクラス代表就任パーティーが始まった。
パーティーと言っても、夕食を食った後だから食い物はねぇが、その代わり多くの飲み物が振る舞われている。
「で・・・なんでお前らは俺の両サイドを固めてんだよ」
「お前が校則違反しない為だ」
「そうです」
俺の右隣には織斑と山田
左隣には・・・何故かオルコットが居る。
ちなみに・・・この3人と一夏、篠ノ乃には俺が喫煙しているのがバレているから・・・そのためだろう。
(面倒くせぇ・・・)
そう思って、一夏のもとへ行こうとした俺を、山田が止める。
「どこに行くんですか?」
「一夏のとこ」
山田に顔だけ向けて言うと、俺は一夏達の居る方へと歩いていった。

千冬視点
「まったく・・・」
一夏のもとへ歩いていった大神を見て、私は溜め息を吐いた。
「織斑先生も、山田先生も・・・真人さんを心配してらっしゃるのですね」
オルコットがそんな事を言ってきたので、私は生徒達を見た。
「生徒を心配するのは教師として当然だ。何も大神だけじゃない」
「そうですか？真人さんを見る時、二人とも違う目をしていらしたので」
「え？！あの・・・」
「まぁ・・・手のかかる弟のように思っているな」
そう言って、私は一夏と話している大神を見る。
「アイツは見たまんまの意味で犬・・・いや、狼だ。リードを握っておかないと、何処に行くか分からん」
以前も、休日にフラッと居なくなったかと思えば、タバコの入ったコンビニの袋を持って帰ってきていたしな。
まったく・・・校則違反はするくせに、授業態度は普通の生徒と変わらないのだから質が悪い。
「そういうオルコットは、大神を嫌っていたように見えたが・・・どういう風の吹き回しだ？」
「・・・その言葉、真人さんからも聞きましたわ」
返すような私の質問に、オルコットは小さく苦笑いを浮かべて生徒達・・・いや、その中にいる大神を見た。
「真人さんは、私に変わるチャンスを下さいました。私は、代表候補生という肩書きに溺れて、「自分は周りとは違うんだ」と思っていました・・・今思うと、傲慢ですわね」
オルコットの話しを聞きながら、私は「そうだな」と短く返事を返す。
「でも・・・彼に否定されて気づかされたんです。私は、近くに焦

点を合わせすぎていたんだと・・・いままで、脇目も振らずに走ってきたから、周りを見る余裕を持ってなかったと」
だから・・・そう言って、オルコットは小さく笑みを浮かべた。
「だから・・・今は感謝していますわ。それに・・・」
「？」
「彼の事がもっと知りたい・・・そして、出来れば彼の傍に居たいと思っています」
「・・・そうか」
最後にオルコットが言った言葉・・・その言葉が、何故か胸に違和感を感じた。

真耶視点
オルコットさんの話しを聞いて、私は思った。
生徒である事が、羨ましいと。
彼・・・大神君と、同じ立場であるオルコットさんが、とても羨ましいと。
何時から・・・大神君を意識し始めたんだろう。
オルコットさんの言葉が、私の胸に針を突き立てた。
私と大神君
教師と生徒
この溝は・・・埋める事が出来るのでしょうか？
私は・・・大神君の居場所に入る事が出来るのでしょうか？
「・・・だ・・・・・山田」
「え・・・っ！」
ふと、誰かが呼ぶ声が聞こえたので、視線を移動させると、私の前に大神君が来ていました。
大神君の事を考えていただけあって、顔が一気に熱くなるのを感じる。
「大神、戻ってきたのか」
「ちっとばかし疲れたんだよ」

大神君と織斑先生が話していたけど、私はそれどころじゃなかった。
（顔、見られてないよね・・・？）
そう思いながらチラッと大神君を見ると、彼は生徒達を見ていた。
「ったく・・・アイツら元気過ぎだ。ちっと付き合ってみたが、身がもたねぇ」
「ほぉ、お前でもアレにはついていけんか？」
大神君の言葉に、織斑先生が小さく笑みを浮かべた。
ズキッ・・・と、胸の奥が痛む。
自分と彼の距離が、近いのに遠く感じた。
「血の気の多い馬鹿と違うベクトルで疲れるわ・・・」
けど・・・そう言って大神君は、生徒達の方を見たまま小さく笑みを浮かべました。
「こうして馬鹿騒ぎすんのも悪くねぇ・・・」
「・・・大神君」
「あ、どうした？」
私の声に気づいた大神君をジッと見つめる。
逆立った銀色の髪
狼を彷彿させるつり上がった瞳
初めて会った時に来ていた制服
彼の姿を見るだけで、鼓動が早くなるのを感じた。
「居場所は・・・出来ましたか？」

真人視点
俺は、山田を見た。
居場所は出来たか、そう聞いてくる山田の目はどっか寂しそうで
捨てられた子犬というか、なんというか・・・見てられねぇ。
だから・・・
「ぁ・・・」
俺は、山田の頭を撫でた。
割れ物みてぇな今のコイツを安心させるように、出来るだけ優しく。

「出来たぜ・・・このクラスの馬鹿共(やつら)が俺にとって大切なもので・・・アイツらと過ごす時間が、俺の居場所だ。勿論・・・織斑とお前もな」
そう言いながら、俺は山田の頭を撫で続ける。
そんな時
「お、君が噂の大神君だね！」
俺たちの目の前に、一人の女子が来た。
リボンの色から見て、同じ学年じゃねぇのは確かだな。
「私は2年の黛薫子、よろしくね。新聞部の副部長やってまーす。はいこれ名刺」
そう言って、黛は俺に名刺を渡してきた・・・つか、画数多いな。
お役所仕事の時に大変そうだ。
「織斑君には今さっきコメントもらってきたから、大神君とセシリアちゃんもコメントちょうだい」
黛の言葉を聞きながら一夏を見ると、俺たちを見て苦笑してやがった。
アイツ・・・どうせ「まぁ、頑張ります」くらいしか言ってねぇな。
「ま、コメントっつーコメントはねぇけど・・・一言だけ」
「お、何？」
小さく溜め息を吐いて話す俺に興味を持ったのか、黛はボイスレコーダーを俺に向けてきた。
「俺の居場所(ナワバリ)を荒らす奴は噛み砕く」
「おぉ、良いね！そういうカッコいいのを待ってたんだよ！」
黛は、テンションを上げながら俺の言葉をボイスレコーダーに録音すると、今度はオルコットにコメントを求める。
「そうですわね・・・今回の事で、私は自分の傲慢さに気づく事が出来ました。これからは、皆さんと一緒に少しずつ変わっていこうと思います」
そう言って黛にコメントするオルコットの表情は清々しく、クラス代表決定戦の時の態度とは大違いだった。

本当、それこそどっかの湖に落ちた某ガキ大将みたいな変わり様だ。
「じゃあ、専用機持ちで写真を撮りたいから、織斑君の所に行ってもらえるかな？」
オルコットのコメントを録音し終えると、黛は一夏を指差しながら歩いていった。
「はぁ、面倒くせぇ・・・」
「写真ですか・・・着替えて・・・」
俺が面倒そうに溜め息を吐いていると、オルコットが何故か俺を見た。
「そのままで良いじゃねぇか。さっさと終わらせようぜ」
そう言って一夏達の方へ行こうとする俺を見て、オルコットは何処か拗ねたような表情を見せた。
まったく・・・訳が分かんねぇ。
その後、俺と一夏、オルコットの3人で写真を撮ったんだが・・・
デジカメのシャッターが押される瞬間、クラスの全員が入り込んでた。
しかも、織斑は俺の後ろ、山田は俺の左隣をがっちりキープしてやがる。
女の行動力ってのは・・・おっかねぇな。

「あの・・・」
パーティーが終わり、クラスの奴らが部屋に帰っていって
俺も部屋に戻ろうかなんて事を考えていると、山田が俺に声をかけてきた。
「どうした？」
「その・・・お願いが」
お願い？
そう言って、山田を見ると・・・少し顔が赤くなっていた。
酒は・・・いや、学生のパーティーだし、酒はなかった。
熱でもあんのか？

「ありませんよ・・・」
口に出ちまったのか、山田は少し拗ねたように口を尖らせる。
「で、お願いってなんだよ」
「えっと・・・」
山田は、そう言って少し視線を泳がせる。
まるで、放課後のオルコットのときと同じだな
そう考えていた時、山田が口を開いた。
「名前・・・」
「名前？」
山田が呟いた言葉をおうむ返しすると、小さく頷いた。
「山田じゃなくって・・・真耶って呼んでくれますか？」
なんで、急に名前で呼んで欲しいなんて言ってきたんだ？
そう思いながら山田を見ると、何処か期待したような目で俺を見てくる。
「まぁ、良いけどよ・・・織斑が五月蝿ぇから、学校以外になるぞ」
「はい」
俺の返事に満足したのか、山田・・・真耶は小さく笑った。
「じゃ、部屋に戻るわ」
「あまり夜更かししたらダメですよ？」
「お前もな」
「私は先生ですよ？」
そう言って胸を張る真耶を見て、俺は小さく溜め息を吐く。
お前は、あんま教師に見えねぇんだけどな・・・。
「分かったよ。じゃ、明日な・・・真耶」
ポンと頭に手を置くと・・真耶は一気に顔を赤くした。
「熱あるんなら、無理すんなよ」
そう言って、俺は部屋に帰った。

「チーッス」
「おはよう、真人。なぁ、転校生の噂聞いたか？」

朝、席に着くなり、隣の一夏が話しかけてきた。
転校生も何も、今は４月だ。
「転校生って・・・ 此所の転入試験って、確か条件が厳しくなかったか？国からの推薦とかあったろ？」
「なんでも、中国の代表候補生らしいですわ」
話しを聞いていた俺が質問すると、その質問に答えたのはオルコットだった。
「おぅ、オルコットか」
「セシリア」
「あ？」
オルコットの言葉に、俺はつい、間の抜けた返事をした。
すると、オルコットは俺の耳元に口を寄せてきて
「セシリアとお呼びください。山田先生だけでは、不公平ですわよ？」
なんて言いやがった。
コイツ・・・ あの時のやり取りを見てやがったのか。
「はぁ・・・ わーったよ。おはよう、セシリア」
「はい、おはようございます」
俺の耳元から口を話したオルコット・・・ セシリアを見て、小さく溜め息を吐きながら挨拶をすると、セシリアは笑顔で返事を返してきた。
「どんな奴なんだろうな」
「ま、ちっとばかし気にはなるな」
そんな、一夏と俺のやり取りを聞いていた篠ノ乃とセシリアは少し不機嫌そうな顔をした。
「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」
一夏の席に歩いてきた篠ノ乃が、んな事を言っていた。
そういえば、もうそんな時期か。
（一夏（コイツ）に叩き込んだのは基礎知識と体の動かし方だけだったな）

「ま、これからＩＳの扱い方を俺らで教えればある程度まで行けるだろ」
幸いな事に、近距離格闘型の篠ノ乃、遠距離型のセシリアが居る。
一夏の武器は刀だったから・・・扱いは篠ノ乃に教えてもらった方が良いだろうし
セシリアは代表候補生ってこともあって、基本動作の技術は俺よりも教えるのが上手いはずだ。
「男なら勝ってみせろ、一夏」
「織斑君が勝つとクラス皆が幸せだよ！」
「フリーパスのためにも！」
・・・あぁ、そう言えば、対抗戦の優勝賞品って、デザートの半年フリーパスだったか。
「・・・幸せだろうけど、限度守らねぇと太るぞ」
俺の小さく呟いた一言で、クラスの空気が凍った。
古来より、女子は甘いものが好きらしい。
そして、そんな女子の天敵は・・・体重計と相場が決まっている。
「ま、程々にしろ」
「・・・ま、まぁ・・・専用機持ってるのはあと４組ぐらいだから楽勝だよ」
俺の言葉から回復した女子が、一言言うが・・・顔が引きつっていて、未だダメージが抜けきってねぇみたいだ。

んな事を考えていた時だった。
「その情報、古いよ」
クラスの出入口辺りで、聞いた事ねぇ奴の声がした。
視線を出入口に向けると、一人の女子が腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっていた。
「２組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」
ドアにもたれかかって喋る女子を見て思った。

コイツ・・・無理に気取ってやがる。
「鈴・・・・・・？お前、鈴か？」
俺の隣で、入り口にいる女子を見ていた一夏が声をかける。
どうやら・・・篠ノ乃同様、一夏の関係者らしいな。
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」
そう言って、俺たちを見た女子・・・凰のツインテールが揺れた。

特別編という名の場繋ぎ

「はい、第一話を読んでくださった読者の皆様、お久しぶりです。希沙羅です」
ども、作者のジャッキーです。
「えと、なんで私たちがこうしているかと言うと・・・」
この小説が総ＰＶ４００００越え、ユニークアクセス６０００越えしたから、その記念・・・という名の、更新するまでの場繋ぎをする為です。
「それで、何をするかというと・・・何故か、作者に私がインタビューするという、どうでもいい企画です」
まったく、作った自分自身でもどうでもいいと思いますよ。マジで。
「じゃぁ、やらなきゃいいじゃないですか」
でも、更新まで時間があるし、その間を待ってくれてるだろう読者様に悪いから。感謝の意も込めて。
「それもそうですね。では、こんな企画ですが」
お付き合いください。
「では、どうぞ」

「では、最初の質問ですが・・・この小説、普通の転生ものとどう違うんですか？」
まずはそこですが、主人公は転生してません。別の世界で生き返るというパターンです。
従来の転生ものは、１から人生をやり直したり、生まれ変わる前に神様が何か力を与えたりしますが、主人公はＩＳを使える意外は普通の人間です。
神様が作った、生前の肉体のバックアップに魂を入れる・・・ゲームに例えるなら、セーブデータを引き継いで続きから始めるような

感じです。
ＧＥＢのアペンド版をやった方は、なんとなく分かるかも。
「なるほど・・・では、主人公とＩＳのイメージはどのようにして出来たのですか？」
主人公のイメージは、シュガーレスを読んでたときに
「こういった不良っぽい男キャラをＩＳにぶちこんだら面白そうじゃね？」
っていうノリですね。
ヴィルのイメージは、元々狼男とか、狼自体が好きだったので。
「ありがとうございます。現時点までで、３人ほどフラグを建てていますが、コレからのフラグ予定は？」
恐らく２人程。
ラウラをどうしようか迷っているところですが、シャルは入れようかと思ってます。

「では、私・・・希沙羅のイメージはどのようにして？」
ぶっちゃければノリですね。
今まで転生物を読みましたが、どこか厳格な老人ってイメージが多かったみたいだったので
「神としては最年少、主人公にいじられる」
キャラってのもアリかな、という感じです。

「ぶっちゃけ、この作品は？」
ノリと勢い、それと作者のゴミ虫レベルな文才で出来ています。

「自己評価低いですね。で、今後、新しいオリジナルキャラを入れる予定は？」
そうですね・・・イメージ的には主人公曰く「いけ好かねぇ奴」を

入れると面白そうな気がしますが、作者の頭がマジでヤバくなりそうなので、どうしようか迷ってるとこです。

「ふむふむ、では、この小説を読んでくださっている読者様に一言」
駄作者が書いてしまった小説を読んでくださって、更にはお気に入り登録やポイント、ユニークアクセスしてくださった皆様には、本当に感謝しています
コレからも、ゆっくりですが更新していきますので、読んでくださると嬉しいです。
読者様の感想が作者の原動力に繋がりますので、そちらの方もかいてくださると嬉しいです。

「ありがとうございました」

今回の特別編は、コレにて閉幕します。
「皆さん、読んでいただきありがとうございました」
先述したとおり、これから頑張って更新していきますので、皆様どうか
「よろしくお願いします」

新入生とお節介（前書き）

ども、作者のジャッキーです。
あの特別編を更新した翌日、総ＰＶが５００００を越えました。
ビックリしすぎて、毛根が死滅するかと思いましたよ、えぇ。
では、待望（？）の最新話です

新入生とお節介

1組に宣戦布告をしに来た2組の転校生・・・ 凰鈴音。
コイツは一夏の知り合いみてぇだが・・・
「何格好つけてるんだ？すげえ似合わないぞ」
「んなっ・・・・・・！？なんてこと言うのよ、アンタは！」
どうやら、コイツの話し方はこっちが素みたいだな。
そう思いながら見ていると、凰の後ろにアイツが来た。
「おい、凰っつったか？さっさと教室に戻った方が良いぞ」
「は？誰だか知らないけど、なんでアンタに指図されなきゃなんないのよ？」
凰の歯に衣着せぬ言い方にイラッとしたが、それを抑えた。
「お前、後ろに居る奴を見てもそれが言えるのか？」
「後ろって、何言ってんのよ・・・」
俺の言葉を聞いて、凰は後ろを振り返って・・・ 固まった。
何故なら、凰の後ろに居たのは1組担任の鬼教官・・・ いや、織斑だったからだ。
「もうＳＨＬの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん・・・・・・」
「織斑先生と呼べ。さっさと教室に戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません・・・・・・」
織斑にビビって、凰がすごすごとドアから離れる。
そのビビり様は、蛇に睨まれた蛙・・・ いや、狼に睨まれたチワワか。
「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！あとアンタも！」
さっきのビビり様とは裏腹に、一夏と俺を指差す凰。
「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」
織斑のドスを利かせた声にビビって、凰は2組に向かって猛ダッシュする。
ったく・・・また面倒な事になりそうだ。
そう思っていた矢先、篠ノ乃含め、一夏に詰め寄った数人のクラスメイトが出席簿の餌食になった。

「お前のせいだ！」
昼休みに入ってすぐ、篠ノ乃は一夏のもとに詰め寄って来た。
まぁ、コイツは午前中だけで真耶に注意五回、織斑に三回叩かれている。
「おそらく、今朝の転校生の事でも考えてたのでしょう」
俺の隣では、セシリアが苦笑いを浮かべながら事を静観している。
まぁ、正直な所は篠ノ乃の自業自得なんだがな。
授業そっちのけで考え事・・・それも織斑の前でやるなんて、飢えた虎の檻に自分から入るようなもんだ。
「まぁ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」
「む・・・・・。ま、まぁお前がそう言うのなら、良いだろう」
「真人さんはどうなさいますの？」
一夏達の話を聞いていると、セシリアが俺を見て尋ねてくる。
「購買で適当にパンでも買う」
そう言うと、一夏と篠ノ乃、そして数人の女子と食堂に向かった。

一夏視点
食堂に着いた俺たちは、それぞれ職権を買った。
俺は今日も日替わりランチ。リーズナブルで毎日違うものが食べられる。ありがたい事この上ない。
ちなみに箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを買っていた。
真人は、学食に併設されている購買でパンを買っている。
「待ってたわよ、一夏！」

どーん、と俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転校生、凰鈴音だった。
ちなみに、俺は略して鈴と呼んでいる。
しかし変わんねーな、こいつ。髪型も昔から一貫してツインテールだし。
・・・ん？おぉ、髪型ですぐ見つけられるっていうのは箒と同じだな。ふたりの幼なじみの意外な共通点に、俺は心の中でぽんと手を打った。
「まぁ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」
「う、うるさいわね。わかってるわよ」
ちなみに、その手にはお盆を持っていて、ラーメンが鎮座している。
「のびるぞ」
「わ、わかってるわよ！だいたい、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」
なんで早く来ないといけないんだよ。エスパーかっつーの。
まぁ、こいつがうるさいのは何時もの事だし、とりあえず俺は食券をおばちゃんに渡す。
「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」
「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」
「どういう希望だよ、そりゃ・・・」
俺の周りの異性は以下同文。なんでこうもアグレッシブな奴ばっかり集まるんだろうな。
俺の不徳の致すところか。それはすまんかった。
「あー、ゴホンゴホン！」
「一夏さん、こんな場所で話し込むと後ろの方に迷惑がかかってしまいますわ。とりあえず、席に座ってからにしませんこと？」
大げさに咳き込む箒と、セシリアの注意で会話が中断される。

お、今日は鯖の塩焼きか。こんがりとついた焼き目が食欲を誘う。
「悪いな、セシリア。真人も向こうの席に座ってるし、行こうぜ」
俺が見た席には、既に真人が座っていて食事を開始している。
「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」
「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」
丸一年ぶりの再会ということもあって、俺は普段では考えられないくらいの質問を投げかけていた。付き合いの長い幼なじみは、やっぱり空白期間が気になるものだ。箒もそうだったし。
「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」
「そうですわね。一夏さんと凰さんだけで話されても、私達にはちんぷんかんぷんですわよ？」
疎外感を感じたのか、箒は棘のある声を
セシリアは、興味津々とばかりに俺たちを見てくるクラスメイトの心中を代弁した。
「あぁ、悪い。コイツは凰鈴音、俺の幼なじみだよ」

真人視点
一夏と話していた転校生、凰は一夏の幼なじみだった。
篠ノ乃とは小四の終わりまで、凰とは小五の頭から中二の終わりまで一緒に過ごしたらしい。
「初めまして、これからよろしくね」
「あぁ。こちらこそ」
そう言って、篠ノ乃と凰はメンチを切りあう。
・・・あぁ、なるほど。
「真人さん」
「アイツら、一夏に惚れてやがるな」
同じ結論に至ったのか、セシリアと小声で話し合う。
だが・・・当の一夏は二人を見て首を傾げている。コイツ・・・ま

さか、自分への好意に疎いタイプか？
「真人さんはどうなんですの？」
セシリアも同じ事を考えていたのか、俺に質問してきた。
多分・・・俺が鈍感かどうかってことだろうな。
「一夏（アイツ）ほどでもねぇと思うけど・・・今まで誰かを好きになったりしたことねぇから、仮に告られても何ともいえねぇ」
「今まで恋愛の経験はなかったんですか？」
「あぁ。８歳の頃から喧嘩三昧の人生だったからな」
そういって、俺は焼きそばパンを齧る。
そうしていると、篠ノ乃が机を叩いて立ち上がっていた。
何があったのかを隣のクラスメイトに聞くと、凰が一夏のＩＳの練習を見てやろうか、と言った事に篠ノ乃が反論していたらしい。
「なぁ、真人はどう思う？」
状況を把握したところで、一夏が俺に聞いてきた。
「凰が練習に付き合うのは歓迎だけどよ・・・今は土台を作るのが先決じゃねぇか？暫くは篠ノ乃に練習を見てもらって、そっから凰に手伝ってもらいながら応用を覚えりゃ良いと思うぜ」
「そっか、ありがとな」
「ちょっと、なんでアンタが一夏のことに口出しすんのよ！」
俺の助言に一夏が礼を述べると、今度は凰が俺に向かって反論してきた。
「お前な・・・同じ事でも教え方がバラバラだったら身につかねぇだろうが」
人の教え方ってのは十人十色。
同じ事でも、教え方は人それぞれだ。
今までを見て思ったけど、篠ノ乃は擬音が多くて、ありゃ教えるとは言えねぇ。
俺は、知識は身近なモノに例えて分かり易く、技術は模擬戦で直接体に叩き込ませるスタンスをとっている。
凰の教え方がどうかは分からねぇが、これ以上別の教え方が入ると、

今の一夏じゃ頭がこんがらがっちまう。

「一夏の武器は雪片・・・刀だ。扱いは剣道やってる篠ノ乃が詳しいだろうから、今はそっちに専念させる。それが終われば、凰が模擬戦なりして実践経験を積ませれば良いだろ」

「む・・・でも、なんでアンタに指図されなきゃなんないのよ」

「一夏(コイツ)に基礎知識と基礎技術を叩き込んだのは俺だ。初心者ってのは、最初の教え方で出来る奴になるかならねぇかが決まるって聞いたからな。出来るだけ初めのメンバーだけで土台を固めてぇんだよ」

そう言うと、俺は残りの焼きそばパンを口に放り込んで立ち上がる。

「土台が出来れば、あとは好きに出来る。今のとこは我慢しろや」

ゴミをゴミ箱に放り込むと、俺は食堂の出口へと歩いていく。

「あ、私も行きますわ」

俺が行こうとしている場所に気づいたのか、セシリアも急いで食器を片付けに向かった。

放課後、俺と一夏、篠ノ乃、セシリアの4人は第3アリーナに来ていた。

一夏と篠ノ乃は、俺とセシリアから離れた場所で【雪片弐型】を使って特訓している。

で、俺とセシリアは・・・上空で模擬戦をしていた。

互いに持っている得物は近接用の武装。

俺が持っているのは、ヴィルが最近になって使用許可を出した【狼牙(ウルファング)】。

刃が波状になっている片手剣だ。

対して、セシリアが持っているのは【インターセプター】

これは、授業中に見せた事のある近接用の武装だ。

「オラァッ！」

「くっ！」

俺の一撃を凌いだセシリアは、距離をとってブルー・ティアーズを

展開する。
縦横無尽に、俺の死角を狙ったビームが辺りを飛び交う・・・が
「甘ぇんだよ！」
「それはどうですか？」
パターン化しているビームを交い潜って接近してくる俺を見て、セシリアがほくそ笑んだ次の瞬間。
「うぉっ？！」
俺は、ヴィルに思い切り体を引っ張られてビームを躱す・・・今のは・・・
『ふむ、セシリア嬢はフェイントを入れてくることで、先の戦闘での短所を消したか』
『悠長に関心してんじゃねぇ！』
そう。
今まで俺の死角・・・上下と後ろだけじゃなく、斜め後方から時間差でビームを撃ってきた。
「前までの私ではありませんわよ？」
「そうみたいだな・・・！」
セシリアの言葉に返事を返し、俺は【暴風加速】でセシリアに接近しながら背部スラスターを展開して、６機の小型自立兵器【狩猟する狼】を射出する。
「ビット兵器はお前だけの専売特許じゃないんだよ！」

セシリア視点
フェイントを入れたブルー・ティアーズの攻撃を躱し、ビット兵器を射出した真人さんは、私に接近して来た。
「くっ・・・そう簡単に接近させませんわよ！」
そう言うと、私はスターライトmｋ?を乱射して弾幕を張った。
しかし・・・
「オォォォォォォォォォォォォォォ！」
「！？」

彼は・・・真人さんは、その弾幕にまっすぐ突っ込んでくる。
あの時と変わることなく、時に躱し、時に受け止めながら
私に向かってまっすぐ・・・。
不器用に、それでも、まっすぐ前を見て。
何時の間にか、私は乱射を止めていて・・・ブルー・ティアーズも
全て撃ち落とされていた。
「ふふっ・・・」
真人さんは、やっぱり凄い人。
他の方だと、馬鹿だと思う行動でさえ、彼が行うとカッコ良く見え
てしまう。
だったら・・・
「私も、答えないといけませんわね」
そう呟き、スターライトｍｋ？を収納してインターセプターを展開
すると、目前まで迫ってきている真人さんを見る。
「はぁぁぁぁっ！」
「ウォラァァァッ！」
私と真人さんは、互いに精一杯の声を張り上げ・・・そして、ぶつ
かり合った。

真人視点
放課後の模擬戦が終わってから時間は過ぎて、時刻は八時過ぎ。
俺は、いつものように寮の屋上でタバコを吸っていた。
ちなみに、ヴィルは獣形態で俺の隣に座っている。
『セシリア嬢もだいぶ変わられたな』
「そうだな・・・まさか、自分からぶつかってくるなんて思わなか
ったぜ」
放課後の模擬戦・・・そこで、セシリアはあろう事か、俺に苦手な
接近戦を挑んで来た。
結果、勝ったのは俺だったが、セシリアの行動は、俺の意表を十分
に突く事が出来た。

「少し前まで、自尊心のかたまりだった奴がよ」
『主に会った事で、彼女は変わる切っ掛けを得たのだろうな』
以前のセシリアを思い出し、俺とヴィルは小さく笑みを浮かべた。
本当・・・ものすげぇ変わり様だぜ。
「さて、戻るか」
『了解』
吸い殻を携帯灰皿に入れると、俺とヴィルは屋上を後にした。

部屋に戻っている道中、俺の横を小柄な女子が駆け抜けていった。
「今のって・・・」
『凰だな』
視線を移動させると、小柄な女子が、後ろで2つに結んだ髪を揺らして走っていた。
だが、俺が気になったのは、その姿ではなく・・・。
（アイツ・・・なんで泣いてたんだ？）
俺の横を通り過ぎる瞬間、凰の目に涙が浮かんでいる事だった。
『何かあったのだろうな・・・』
ヴィルの言葉に、思考を巡らせる。
凰が絡んで、尚かつ、涙を流す原因・・・それを考えた時、俺の中に一人の男が浮かび上がってきた。
「・・・面倒くせぇな」
小さく呟いた俺は、足を自分の部屋・・・ではなく、凰を泣かせた原因であろう男・・・織斑一夏の部屋に向けて進んでいった。

一夏視点
放課後の練習から時間が過ぎた夜の八時過ぎ
俺と箒の部屋に鈴が押し掛けた。
箒に部屋を代われと言ってきたと思ったら、今度は俺に
「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」
なんて聞いてきた。

その約束は、たしか
「鈴の料理の腕が上がったら、毎日酢豚をおごってくれる」
だったはず。
俺の記憶が正しければ、そんな約束だった。
なのに・・・鈴は俺の頬を叩いただけでなく、俺に罵詈雑言を叩き付けて部屋から出て行った。
俺が悪いんだろうな・・・多分。
でも、男の風上にも置けないというのにはカチンと来た。そこまで言われる程の約束だった覚えが無いからだ。
その後、箒にも怒られ、起きていたって良い事はないと思って寝ようとした・・・その時。
「一夏、凰の奴が泣きながら走っていったけど、なんかあったのか？」
俺のクラスメイトで、この学園に居るもう一人の男子
真人が部屋に来た。

真人視点
「なるほど・・・」
一夏の部屋に来た俺は、一夏から事のすべてを聞いて溜め息を吐いた。
要は、こういう事か。
鈴は、小さい頃に一夏とある約束をした。
その内容は、自分の料理の腕が上がったら、毎日酢豚を食わせてやる言い換えれば・・・「俺に毎日みそ汁を作ってくれ」の中国版、しかも女が男に言うパターン。
それを、一夏（このバカ）は約束を履き違え、毎日酢豚を奢ってくれると勘違いした、という事。
それに腹を立てた凰が、一夏を引っ叩いて暴言を吐き、部屋から出て行った・・・と。
「『それは、お前が悪い』」

俺とヴィルは、互いを見合わせた後、一夏を見てバッサリと切り捨てた。
まぁ、全体的に一夏が悪いという訳ではない。
ストレートに「結婚してくれ」と言わず、妙な言い回しをした凰にも非があるが・・・
女を泣かせた、というマイナスから、これは一夏の方が悪い。
「凰にも悪いところはある。でも・・・女を泣かせたお前が悪い」
『この手の喧嘩は、先に折れた方が得策だろうな』
「だからって、ココで引き下がれるかよ・・・」
俺とヴィルが軽く睨みながら言うと、一夏はふてくされたように小さく呟いた。
「無駄に意地張っても良い事ねぇだろうが。それで、余計に拗れてハイおしまいってオチだってあるんだぜ？」
『ま、私たちが言える事はこのくらいだろう』
ヴィルが言った言葉に「そうだな」と返事を返すと、俺たちは一夏に背を向けた。
「お節介で言っておくが・・・凰の言葉、よく考えてみろよ。って・・・鈍感だから無理か」
そう呟くと、俺は一夏の部屋を後にした。

『で・・・主、これからどうするつもりだ？』
一夏の部屋を出た俺たちは、自分の部屋・・・ではなく、屋上に足を運んでいた。
多分だが・・・そこに凰が居る気がしたからだ。
まったく・・・こんな柄じゃねぇ事、本当ならしねぇのによ。
「ま、なんとかするしかねぇだろ」
俺も、本当に丸くなっちまったもんだ。
そう思いながら屋上のドアを開けると・・・予想通り、凰がいた。
俺は、凰に声も掛けずに隣に行き、タバコを口にくわえた。
「・・・何の用？」

そう言う凰の目は腫れていて、表情も「怒ってます」ってオーラを出しまくっていた。
「別に、タバコ吸いに来ただけだぜ？」
「ふぅん・・・」
俺の返事を聞くと、凰は鞄を持って部屋に戻ろうとした。
「まったく・・・隣で騒ぐなよ。寝るに寝られねぇし、お前らの痴話喧嘩がダダ漏れだったぞ？」
「・・・嘘言ってんじゃないわよ。アンタ、あたしとすれ違った後で一夏に聞いたんでしょ？」
「何のことかね、お前とすれ違ったっけか？」
態とらしく凰に注意をすると、鋭い視線で睨まれた・・・が、それをどこ吹く風と受け流す。
「この学校に2人しか居ない男を見間違える訳ないじゃない」
「他人の空似って奴じゃねぇか？」
凰の言葉に口元を歪めて返すと、凰は諦めたように溜め息を吐いた。
「で・・・何か言いに来たんでしょ？」
「さぁね・・・俺は独り言が癖だから聞き流していいけどよ」
そう言って、俺はくわえたタバコに火をつけて話し始める。
「ありゃ、一夏が悪いだろうな。なんせ、女の子の告白をはき違えて受け止めたんだからよ・・・けど、凰も悪いっちゃ悪いぜ。あの鈍感(いちか)に妙な言い回しで告白すんだからよ」
「な、何言ってんのよ！アイツなんか・・・」
「そうか。じゃぁ、篠ノ乃に取られても文句言わねぇよな？」
「そ、それは・・・」
俺の言葉に、顔を真っ赤にして反論する凰を見ながら俺は紫煙を吐いて溜め息を吐く。
「一夏には、よく考えろって言ってある。後はお前たちでなんとかしろや」
そう言うと、俺は短くなった吸い殻を灰皿に入れて屋上の扉を開けた。

「アンタ・・・」
「あ？」
「アンタ・・・名前、なんて言うのよ」
俺が部屋に戻ろうとするのを見た凰が、まだ赤みを帯びた顔で俺を見た。
「・・・真人だ。大神真人」
凰の質問に、短く返事を返した俺は、再び自分の部屋へと足を運んだ。

クラス代表戦と招かれざる客　前編（前書き）

ども、作者のジャッキーです。大変長らくお待たせしました。
今回は前後編にしてみました。
後編も、頑張って近日中に更新出来るよう頑張ります

クラス代表戦と招かれざる客　前編

一夏と凰の喧嘩に、お節介にも首を突っ込んだ翌日の放課後。
「その・・・鈴、昨日は悪かった」
「別に良いわよ・・・私の方こそ、悪かったわね」
第3アリーナで一夏と凰は向かい合って、互いに謝罪の言葉を述べていた。
ま、これで全部丸く収まった・・・か？
「そういえば、昨日思い出したんけど、あの約束・・・正確には「料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる？」だっけ。で、どうよ？上達したか？」
「え、あ、う・・・・・・」
一夏の言葉に、凰は狼狽えながら顔を赤くして俯く。
その様子を見ていたんだが・・・唯一、その様子が面白くないであろう人物が一人。
一夏のもう一人の幼なじみ、篠ノ乃箒だ。
「篠ノ乃」
一夏達のところに行こうとした篠ノ乃を呼び止める。
「なんだ」
「お前、何しに行くつもりだ？」
「・・・・・・」
俺の言葉を聞いた篠ノ乃が黙り込んだ。
・・・多分、一夏達（アイツら）のやり取りが面白くねぇから、嘴を突っ込もうとしたんだろう。
「嫉妬すんのも勝手だけどな・・・お前がやろうとしてる事って、端から見たら格好悪いぞ」
『恋敵の足を引っ張って、少しでも一夏と近づこうとしているように見えるな』

「なっ・・・」
俺とヴィルの言葉に、篠ノ乃は顔を赤くして目を見開いた。
まさか、今まで気づいてなかったと思ってたのか？
「そりゃ、確かに一夏に近づく事は出来るけど・・・お前を見る印象が随分と変わるだろうな」
『一夏を得る為なら、周りを全て蹴落としても構わない小物にな』
畳み掛けるように話す俺とヴィルの言葉を聞いて、篠ノ乃は顔を俯かせる。
「ま、好きにしろ。俺たちには関係ねぇからな」
『そうだな。恋敵を蹴落とすも、正々堂々、真っ向から勝負するのもお前の勝手だ』
そう言って、俺とヴィルが立ち去ろうとしたその時・・・
「・・・ってやる」
「あ？」
「やってやると言ったんだ。相手が誰であろうと、私は真っ向からぶつかって・・・一夏の傍に立つ」
俺たちを見た篠ノ乃の目を見て・・・俺は口元を歪めた。
「そうかよ」
「真人！」
篠ノ乃に短く返事をすると、今度は凰が駆け寄って来た。
「その、アンタには、借りができたわ・・・ありがと」
そう言って、凰は俺を見て小さな声で礼を言ってきやがった。
「・・・何のことだかな。忘れちまったよ」
その言葉がむず痒く感じ、そっぽ向いて答えると、俺とヴィルはアリーナから出て行った。
ちなみに・・・その後、セシリアに軽く問いつめられ事情を説明すると、セシリアから「不器用なお節介ですわね」と微笑みながら言われた。
それから数日後、クラス代表戦当日の第2アリーナ

第1試合は、一夏と凰の試合だった。
噂の新入生同士の闘いとあって、アリーナの観客席は満員。
それどころか、通路まで立ち見の生徒で埋め尽くされている。
会場入り出来なかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。
余談だが・・・何処かの馬鹿が、この試合のチケットを転売しようとしていた事を、何故か織斑が俺に愚痴って来た。
まぁ・・・その馬鹿(せいと)の冥福を祈ろう・・・死んでないけど。

俺と篠ノ乃、セシリアの3人は、一夏と凰がアリーナで向かい合う様子をピットのモニターで見ていた。
二人の表情は晴れやかで、数日前の険悪な様子とは大違いだ。
「勝ちは譲らないわよ」
「それはこっちも同じだ」
互いにそう言い合うと、試合開始のブザーと同時にぶつかり合った。
「始まりましたわね」
「そうだな」
セシリアと短く会話を交わすと、俺たちはモニターで試合の様子を見た。
凰のＩＳ・・・【甲龍】は、一夏の白式と同じ近接のパワータイプ。
パワータイプ同士の闘いだが・・・やっぱり、経験がものを言う。
一夏も善戦しているようだが、凰が押していた。
凰の嵐のような攻撃に、一夏が距離をとろうとしたその瞬間・・・
甲龍の肩アーマーが開き、一夏が見えない何かに「殴り飛ばされた」。
「！今のは・・・」
「衝撃砲ですわね」
『空間に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じた衝撃を砲弾化して打ち出す・・・セシリア嬢のブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器だ』

篠ノ乃の驚きに満ちた声に、セシリアとヴィルが説明をする。
しかし・・・【見えない砲撃】か・・・厄介だな。
その証拠に、凰が放つ衝撃砲に苦戦する一夏がモニターに映し出されている。
それをみる篠ノ乃の表情は不安に彩られていて、一夏の無事を願うばばかりと言いたげだった。
「一夏に勝算があるとすれば・・・」
『瞬時加速』
「ですわね」
モニターを睨みながら俺が呟いた言葉に、ヴィルとセシリアが言葉を続ける。
意を決したのか、一夏は再び凰と向かい合っている。
多分、瞬時加速と一夏のＩＳ・・・白式の特殊能力を使うことにしたんだろう。
互いに睨み合って僅かな時間が流れた時・・・一夏が動いた。
だが・・・
ズドォォォォンッ！！
「「「『！？』」」」
試合が行われているアリーナに・・・招かれざる客が乱入してきた。
モニターの向こう側では、一夏と凰が乱入してきただろう相手の攻撃をよけている。
煙を晴らすようにビームを連射した後、「それ」はゆっくりと浮上して、姿を現した。
その姿は、ハッキリ言って異形だった。
深い灰色をしたＩＳは腕が異様に長く、つま先よりも下に伸びている。
更に、首というものがない。肩と頭が一体化しているような・・・
どこか、銀色の超人に出てくる棲星怪獣のような感じだ。
何より異様なのが、その体を覆うＩＳが『全身装甲』な点だ。
以前織斑に聞いたんだが、ＩＳはシールドエネルギーによって殆ど

の防御が行われるため、全身に装甲を形成する必要がないそうだ。
防御に特化したＩＳで物理シールドを持っているものがあるが・・・
体全体を覆い尽くし、肌が１ミリも露出していないＩＳというのは
ヴィル以外なかった。
「なんですの・・・あのＩＳは」
「さぁな。とりあえず、セシリアは篠ノ乃引っ張って織斑の所に行
け。放っとくと一人で馬鹿な真似しそうだからな」
そう言うと、俺はセシリア達に背を向けてピットの扉の前に立つ。
「真人さんは、どちらへ行かれますの？」
「決まってんだろ」
俺の方を見ながら聞いてくるセシリアに、口元を歪めて笑い
「タバコ吸いにいくんだよ」
そう呟いた。

千冬視点
「失礼しますわ」
山田君とともに管制室でアリーナの様子を見ていた時、オルコット
と篠ノ乃が入ってきた。
「オルコットか・・・で、何故篠ノ乃を捕まえているんだ？」
入ってきた二人は走っていたのか息が切れており、篠ノ乃は、オル
コットに腕をがっしりと掴まれている。
「それが・・・真人さんに篠ノ乃さんが馬鹿な真似をしそうだから、
引っ張って織斑先生の所へ行けと」
オルコットの言葉を聞いた私は、視線を篠ノ乃に向ける。
その篠ノ乃は・・・何か、気まずそうに視線を逸らした。
大方声援だけでも、と考えでもしたのだろう。
オルコットも、アリーナに入りたいが、大神に言いつけられた事も
あって動くに動けず、と言った所か。
「で、その大神は何処へ行った？」
「たしか、タバコを吸いに行くと仰ってましたが・・・」

オルコットの返事を聞いて、私は思案する。
短い期間しか過ごしていないが、大神は何処か、身内に甘い感じがしている。
もしかすると・・・そう考えていた時だった。
ドォォォォン・・・・！
アリーナに響き渡る轟音・・・それは、大口径の砲弾が発射される音に似ていた。
「一体何が・・・・・・」
突如響き渡った轟音に、私は視線をモニターに移動させる。
そこに写っていたのは、一夏と凰、所属不明のＩＳ。
そして、ステージに新たに乱入した銀色の砲弾・・・いや、違う。
あれは・・・・・・。
「まったく・・・後で反省文だ」
呆れるように私は溜め息を吐きながらモニターに写った砲弾を・・・ヴィルを展開した大神を見た。

クラス代表戦と招かれざる客　後編（前書き）

ども、毎度お馴染み作者のジャッキーです。
今回は後編・・・いつもより短いかな？

追伸ですが、他に連載していた2作を更新停止し、新たに始めた「魔法少女と動く死体」の2本を今後更新していきますので、そちらもよろしくお願いします

クラス代表戦と招かれざる客　後編

第2アリーナBピット
セシリア、篠ノ乃の二人と別れた俺とヴィルは、そこに来ていた。
何故かって言えば・・・なんでだろうな？
『で・・・どうするのだ？』
「どうするって言われてもな・・・」
隣にいるヴィルに質問され、俺は面倒そうに頭を掻く。
乱入してきた奴を見て、無意識に体を動かした結果、此処に来ちまった訳だが・・・それからどうしようか、なんて考えても無かった。
ただ・・・一言だけ言えるのは
「タイマン張ってる奴らの間に割り込んできた馬鹿（アレ）は、気に入らねぇな」
俺の言葉から、コレからやる事が決定した。
乱入者（バカ）を潰す。
「そうと決まれば」
『了解だ、主』
短いやり取りで何をすれば良いのか分かる。
ヴィルは、俺の言葉に短く返事をすると、僅か1秒足らずで展開を終える。
『ふむ、遮断シールドがレベル4に設定されているな』
『てことは・・・』
『通常の攻撃で突破出来るような硬さではない、という事だ』
『面倒くせぇな・・・んな威力のデケェ攻撃なんて、お前にあったか？』
遮断シールドは、ステージを覆うように展開されていて、それはゲートの前にも展開されている。
つまりは、ピットの扉をぶっ壊しても、その先にあるシールドを壊

さねぇ限り、ステージに乱入する事は出来ねぇって事だ。
心底面倒そうに顔を顰めてヴィルに聞くが、返事は無かった。
『・・・あるにはある。が、相応の負担がかかるぞ？』
聞いてから1分経った頃か、ヴィルが返事をしてきた。
相応の負担ね・・・。
『んなもんにビビって此所でチンタラしてるよかマシだろ』
ヴィルの言葉に、俺は短くそう言った。
そうだ。此所でその「負担」ってのにビビってたら何も出来ねぇ。
今までだって、ビビってたらボコられて、居場所を荒らされてる。
『それもそうだな・・・ならば、使うとしようか。私の奥の手を』

ヴィルがそう言った瞬間・・・ピット内に突風が吹き荒れた。
いや・・・違う。これは【吹き荒れている】んじゃない。
【物凄い勢いで空気が吸い込まれている】。
『単一仕様能力（ワンオフアビリティー）【暴嵐纏う人狼（ヴァナルガンド）】発動』
その声と同時に、俺の目の前にウィンドウが表示される。
いつも見ている空気圧縮率を表示したものだが・・・その桁が違いすぎる。
物凄いスピードで空気がスラスターにある吸気機関【暴風（シュトゥルムヴィント）】に吸収されていく。
『空気圧縮率１００・・・・・・２００・・・３００・・・・・・・３５０・・・』
その様子を、ヴィルが声で知らせてくる。
通常であれば１００％・・・俺が難なく堪えられる値までしか圧縮しない空気（それ）を、その倍以上圧縮し続ける。
『・・・空気圧縮率、操縦負荷限界点に到達。これなら、シールドと乱入者を破壊してもおつりが出るぞ』
ウィンドウに表示された圧縮率の値は４５０％・・・通常の４．５倍は負担がかかるって事を意味している。
それと同時に、その値が操縦者（オレ）が堪えられる負担の限界という事も

意味する。
「そうかい・・・そんじゃ、行くか！」
そう言うと・・・俺は自分の体を「砲弾」として放った。

一夏視点
「くっ・・・・・・！」
一撃必殺の間合い。けれど、俺の斬撃はするりと躱されてしまう。
これで合計４回目のチャンスを逃した事になる。
あの乱入者・・・正体不明のＩＳが試合中に乱入してきてから、俺と鈴は即席のコンビネーションで挑んでいる。
だけど、攻撃が一度も当たらない。
普通なら躱せるはずのない速度と角度で攻撃をしているのにも関わらず、だ。
ゼロ距離から離脱するのに１秒とかからない。
しかも、どれほど鈴が注意を引いても俺の突撃には必ず反応して回避行動を優先する。
（参ったな・・・）
そう考えていた・・・その時だった。
ズドォォォォォ・・・ン！
俺たちの後ろ・・・Ｂピットの方から轟音が鳴り響き、遮断シールドをぶち抜いて銀色の砲弾がステージに入ってきた。
「なに、新手？！」
轟音に嫌でも気づかされた鈴が、音がした方を見て構える。
でも・・・その予想は外れた。
俺は、それを見間違える訳がない。
銀色の全身装甲
その姿は、狼男を模した荒々しさと気高さを感じさせる。
そうだ・・・間違いない。
「いや、あれは真人だ」
「真人！？」

俺の言葉に、鈴が驚いた様子で俺たちの前で止まった真人を見る。
「よぉ、ずいぶんやられちまったみてぇじゃねぇか」
真人は、肩越しに俺と鈴を見ると笑って言った。
正確には、真人の顔は狼を模した仮面に隠されて見えない
でも・・・俺には、真人の笑った顔が見えた。
口元を歪め、獰猛な笑みを浮かべる真人(ケモノ)の顔が。
「さぁて・・・こっからは俺の番だ」
そう言うと、真人は乱入者を見て・・・右手の中指だけを立てた。
「俺の仲間荒(ナワバリ)らしたんだ・・・破壊(ヤ)られる覚悟、出来てんだろうな？」

真人視点
「いくぞオラァ！」
乱入者に宣戦布告すると、俺は真っすぐぶつかっていった。
「なっ！」
「バカ！それじゃただの的じゃない！」
その様子を見た一夏と凰が驚いたように俺に言うと同時に、乱入者は高速回転しながらビームを連射してきた。
だが・・・
「遅ぇ遅ぇ遅ぇ！」
連射する砲撃を、何度も【暴風加速】して避けながら進み続けた。
ドドドドドドドドドッ！
圧縮から解放された空気が放つ衝撃波の音が、俺の動きから遅れて辺りに鳴り響く。
その音は、例えるなら数秒単位で大砲を発射したような音・・・と言えば良いだろうか。
それに近いくらい、大きな音が鳴り響いた。
脚から、腕から、背中から
連続して圧縮した空気が解放され、同時に吸収されていく。
それが、ヴィルの単一仕様能力・・・暴嵐纏う人狼の能力。

必要時にしか使わねぇ吸気機関【暴風】を常時使用状態にすることで、常に暴風加速が出来るようにする。
それだけじゃねぇ。
空気圧縮率を通常時より上げる事で、より速く動く事を実現させている・・・まぁ、その分負担もデケェけどな。
そうしている間・・・僅か5秒足らずか、俺は乱入者の懐に潜り込んだ。
「いくぜ？言っておくが・・・お前（テメェ）よりも俺は速いぞ」
そう言って拳を構えた瞬間、乱入者はバカ出力と言っていいスラスターを使って回避行動を始める・・・が
「オラァッ！」
―先回りした俺の拳が（・・・・・・・・・・）、奴の頭を捕らえた。
その時、違和感を感じた。
コイツ・・・
『主。スキャンを掛けたが・・・ソレは無人機だ』
『そうかい・・・だったら、思い切り暴れていいよなァ！』
どうやら、予想が当たったみてぇだ。
ＣＰＵ戦ってのが、味気ねぇが・・・
ちったぁ、俺を楽しませろよ？

千冬視点
新たな乱入者・・・大神と正体不明のＩＳとの闘いが始まって、僅か3分。
その様子は、もう闘いと呼べるものではなかった。
所属不明のＩＳよりも少し速く大神が動き、一方的に殴り、蹴る。
その様子を見て、オルコットと篠ノ乃は驚愕の表情を浮かべ、山田君は呆然としている。
「あの馬鹿め・・・無茶しているな」
「どういうことですの？」
顔を顰めて呟いた私の言葉に、オルコットが反応して質問してきた。

「大神の暴風加速は、操縦者の負担にならない程度で空気を圧縮している。だが・・・あの動きは、その何倍も速い」
「ということは・・・」
実際に暴風加速を見た事のある山田君とオルコットが何かに気づいたように、モニターを見つめる。
「その分、大神にかかる負担も大きい。それも、大神はそれを何度も、連続して使用している・・・おそらく、もうそろそろ限界だろう」
大神も、あの正体不明のＩＳもな。と付け加え、私はモニターを見た。
その言葉通り、大神は手足を?がれて達磨になった正体不明のＩＳを近接格闘武器で両断
ヴィルが解除されたと同時に前のめりに倒れた。

真人視点
「ぁ・・・？」
目が覚めると、知らねぇ天井が見えた。
「目が覚めたか？」
俺に気づいたのか、聞き慣れた声が聞こえたので視線を移動させると、織斑がパイプ椅子に腰を降ろしていた。
「おぉ・・・」
「アリーナでの出来事は覚えているか？」
織斑の言葉を聞いた途端、今までの事が思い出された。
俺は・・・ヴィルの単一仕様能力を発動させて、乱入者をボコって・・・あぁ、その後で気ぃ失ったんだっけか。
「まったく・・・お前のＩＳの特殊能力がアソコまで規格外だとはな。それを何度も使って・・・お前は馬鹿か？」
「うっせぇな・・・馬鹿言うなや」
織斑の馬鹿発言を聞いてムカついたが・・・体がダリィから、反論だけしておく。

「体に以上はないが、Ｇによる負担が体に残っている程度だ。１日休めば、何時も通りに戻る」
そう言うと、織斑は立ち上がった。
「そうだ・・・お前の勝手な行動に対する罰だが」
「勝手な行動って、俺はタバコを吸いに外に出ただけだぜ？」
「校則違反をしている時点でアウトだ馬鹿。で、罰だが・・・」
俺の軽口を躱して、俺は肩越しに俺を見る。
せいぜい、反省文か？と思っていたんだが・・・
「そうだな。次の休みに買い物に付き合え・・・それと、就業時間外は『千冬』と呼ぶ事。それがお前に対する罰だ」
予想の斜め４５度上をいった罰を言ってきやがった。

設定紹介（前書き）

今回は、ヴィルの特殊能力が明らかになったので、その詳細を紹介します。
不明な点、こうしたら良いんじゃないか？というご意見があれば下さい。

設定紹介

暴嵐纏(ヴァナルガンド)う人狼
フローズヴィトニルの単一仕様能力(ワンオフアビリティー)
搭載されている吸気圧縮機関【暴風(シュトゥルムヴィント)】の圧縮用量を倍にする事で、
通常時の倍の速度での瞬時加速（暴風加速）を常時発動できる状態
にする。
暴風は、腕、脚、背中に搭載されており、通常時であれば背部のみ
を使用して暴風加速を行うのだが、この能力発動の際に、暴風を全
解放。
各暴風で圧縮された空気を用いて、連続して暴風加速を行う一種の
トランザム状態。
だが、デメリットとして圧縮率によって操縦者に掛かる負担が倍増
するため、圧縮できる用量は４５０％
活動時間は３分が限界

また、単一仕様能力とは別だが
人狼の名前にちなんで（？）、月の満ち欠けによって各出力が変動
する。
つまり、満月に近い程各出力は上昇し、新月に近い程出力は低下す
る。
満月の状態で通常の２倍
新月の状態で打鉄と同じ出力となる

真人と千冬と罰ゲーム（前書き）

今回は千冬回（誤字にあらず）です。
千冬ファンの皆様、こんな感じでよろしかったでせうか？
「こんなの千冬じゃねーし！おかしーし！」
と思っても、心の内に留めてくれると助かります、ハイ。

真人と千冬と罰ゲーム

クラス代表戦から数日経った休日の午前１０時、俺は駅前広場で待ち合わせをしていた。
遡ること数日前、乱入者を潰して倒れた俺の見舞いに来た織斑が
『次の休みに買い物に付き合え・・・ それと、就業時間外は『千冬』と呼ぶ事。それがお前に対する罰だ』
と言ったのが事の発端。
俺の格好は学園の制服や学ランじゃなく、以前に真耶と買い物した時に買った洋服・・・ 白のＴシャツに黒のパーカー、７分丈のジーンズという出で立ちだ。
「あの野郎・・・ 遅ぇな」
待ち合わせ時間から１０分、織斑はまだ来てねぇ。
一月くらいしか経ってねぇが、アイツの性分からして時間は守る奴だということは知っている。
だが・・・ 遅い。
準備に時間がかかるようなタマじゃねぇと思うんだがな・・・ そう思った時だった。
「すまない、待たせたな」
「あ？ 漸く来やがっ・・・」
織斑の声が聞こえたので、そっちを向いた俺は固まった。
まず、普段見慣れているスーツ姿じゃねぇ。
白いタンクトップの上に黒いジャケットを羽織り、下は８分丈のジーンズとパンプスという出で立ち
化粧は普段通り・・・ いや、普段より少し薄いか？
俺は、目の前に立つそいつが織斑だと分からなかった。
だが・・・
ゴンッ！

「っ？！」
「人をジロジロ見るとは、良い趣味だな。ん？」
間違いねぇ・・・拳骨かましたうえでこの台詞・・・
普段の見慣れた織斑に間違いなかった。
「ってぇな！出会い頭にぶん殴んじゃねぇよ！」
「ジロジロと見るお前が悪いのだろう。それとも何か、私に見惚れでもしたか？」
そう言って笑みを浮かべる織斑を見て俺は舌打ちした。
「馬鹿言ってんじゃねぇぞ。格好が違ったから、誰か分からなかっただけだ」
「そうか」
頭を擦りながら投げやりにそう言うと、織斑は短い返事をした。
ったく・・・織斑の奴、学校での姿とギャップがねぇか？
「おら、買い物行くんだろうが」
「そうだな。時間もないし、行くとしよう」
んな事を考えながら織斑に言うと、俺たちはレゾナンスに向かった。

千冬視点
駅前のショッピングモール『レゾナンス』に到着した私たちは、洋服売り場に来ていた。
普段着・・・と言っても、教員は休日でもスーツを着ている者もいるのだがな。
「で・・・何を買うんだよ？」
「そうだな・・・」
大神の質問に、私は辺りを見回しながら考える。
学校ではスーツ、寮ではジャージというのが私の普段のスタイルで、大神はその姿を何度も見ている。
私自身、それで問題はないのだが・・・
何故だろうか、大神にはそれ以外の姿も見てもらいたいと思ってしまう自分が居る事に小さく溜め息を吐く。

まったく・・・ここ最近の私はおかしい。
その切っ掛けは、一夏のクラス代表就任パーティー
オルコットの話を聞いた時、胸の中に違和感を感じたのが始まりだった。それに拍車をかけたのが、数日前のクラス代表戦。
大神は、ＩＳの単一仕様能力を初めて使った。
その姿を見た時、私は心配した。
生徒の心配をするのは、教師として当然のことだが・・・その時は、何時もと違う感覚だった。
体にかかる負担を顧みず、乱入して来たＩＳと戦う大神を見て、その心配が生徒に対してのものとは違う事に気づいた。
まさか・・・大神に惚れたとでもいうのか？
いや、まさかな・・・。
だが、何故私は、パーティーの後の山田君と大神の会話を盗み聞きするような真似をした？
何故・・・あの会話を聞いた時、胸に違和感を感じた？
私は・・・
「織斑、どうした？」
その時、大神の声が聞こえて、私は我に返った。
表情は何時もと変わらぬ不機嫌そうな表情だが、気遣ってくれるのが解る。
それが嬉しく思い・・・同時に、別の事でモヤモヤした。
「お前・・・以前、私が言った事を忘れたのか？」
「あ？」
「就業時間外は名前で呼べと言ったはずだぞ」
そう・・・さっき、大神は私を「織斑」と呼んだ
聞き慣れたそれが、何故か腹立たしく思えた。
何故そう思うのか、解らない
なのに何故・・・
『真耶』
『セシリア』

こうも・・・胸が痛くなる？
「・・・はぁ」
私を見ていた大神は、不機嫌そうな表情のまま溜め息を吐いた。
そして・・・

「わーったよ・・・行こうぜ、『千冬』」
私の名前を呼んだ。
「・・・・・・」
なんだ？
ただ、大神に名前を呼ばれた。
『織斑』ではなく『千冬』と。
それだけの事で・・・私は胸が軽くなるのを感じた。
顔が少し熱い。大神は気づいていないみたいだが、顔が赤くなっているだろう
何故・・・？
いや、何故かなんて、既に分かっている。
そうか・・・
私は、気づかない間に大神に惚れてしまったのか。

真人視点
洋服売り場での出来事・・・つっても、名前で呼んだだけだが。
それから、織斑・・・千冬の機嫌は良かった。
一見すりゃ、普段と変わらねぇ様子だが、なんと言うか・・・雰囲気が違った。
名前を呼ぶまでは重いような感じだったが、名前で呼んでからは、それが軽くなった。
で・・・俺たちは何をしているか、と言うと
洋服は既に買い終え、真耶と来た時に休んだ広場で休憩をとっていた。
「で、他に買うものってあるのかよ」

「ないが・・・そういえば」
荷物持ちで疲れた事もあり、力なく聞くと千冬は考え、やがて思い出したように話し始めた。
「山田君が以前まで掛けていなかった眼鏡をかけていたな・・・それも、お前と買い物した翌日からだ」
「・・・マジか」
入学式以降、真耶が俺が贈った眼鏡をかけてるな、と思ってたけど・・・あの翌日からだったのかよ。
あれ以降、入学式まであまり会ってなかったから分からなかったぞ。
「ほぉ・・・その様子を見ると、その原因を知っているみたいだな？」
「・・・俺が買ってやったんだよ。アイツ、眼鏡が合ってなかったみてぇだし、今までの礼も含めてな」
探るような、どこか『不機嫌です』と言いたげな雰囲気を纏って聞いてきた千冬に、俺は観念したように答えた。
すると、千冬は「そうか」とだけ答え・・・意地の悪い笑みを浮かべた。
「山田君に礼をしておいて、私には礼の一つもなしか？」
「お前な・・・買い物に付き合ってやったろうが。それでチャラじゃねぇのかよ？」
「馬鹿言え。あの時は山田君は付き添いだったんだ・・・それで、礼をされるのは不公平じゃないか？」
それって理不尽じゃねぇか？と言おうとしたが、俺はそれを呑み込んだ。
まぁ・・・千冬にはいずれ礼をしようと思っていたし、それが早くなったって考えれば良いか。
「わーったよ・・・で、何か欲しいのか？」
「お前」
今の持ち合わせで足りるんなら買ってやる、と言う前に・・・千冬はまたも俺の予想の斜め上な発言をしてきやがった。

「・・・は？」
「ククク・・・冗談だ。そうだな、大神が決めてくれ」
・・・コイツ、冗談にもほどがあるぞ？
発言には驚いたが・・・俺を欲しがるような奴はろくな奴じゃねぇ。
ただの物好きだ。
そう思いながら、俺たちは近くにあったアクセサリーショップに向かった。

で、目的の店に入ったは良いが・・・千冬に合いそうな物が見つからねぇ。
つか、千冬（コイツ）が普段アクセサリーを付けている姿が思い浮かばねぇ。
学校じゃアクセサリーのアの字すら身につけてねぇしな。
どうしたもんか・・・。
そう思っていた時だった。
一つのピアスが俺の目に留まった。
ゴテゴテとした装飾がねぇシンプルなデザインで、黒い石が埋め込まれている。
どうやらオニキスみてぇだ。
宝石言葉は・・・意志の強さ・冷静さ・喜び・勉強・達成能力・調和・柔軟・目的意識・完璧さ・集中力・運動能力か。
千冬にゃピッタリか。
それに、耳に付けても目立たねぇ大きさだし、値段も手頃みてぇだし。
（コレにすっか・・・。）
そう思うと、俺は千冬に見つからねぇように、そのピアスと穴開け器具（ピアッサー）を持ってレジで精算した。

「ほら」
「ほぉ・・・ピアスか」
俺が袋を渡すと、中身を確認した千冬は小さく呟いて俺を見た。

「アクセサリーを付けてるの見た事なかったし、それだったら付けてても目立たねぇだろ」
「そうだな。お前にしてはなかなかのセンスじゃないか」
「お前にしてはって・・・買い物したのは初めてだろうが」
「そうだったか？」
俺がそう言うと、千冬は微かに笑みを浮かべた。
「言っとくが、付けるのは自分でやれよ」
「分かっている」
そう言って、千冬が袋を鞄に入れたのを確認すると、俺たちはレゾナンスを出た。
外に出ると、日が暮れ始めていた・・・確か、真耶と買い物した帰りもこんな空だったっけか。
「デート中に他の女の事を考えるのはマナー違反だぞ」
「デートじゃねぇし。つか、考え読むなよ」
「読まれやすいお前が悪い」
そう言った千冬の表情は、いつかみたいに何処か不機嫌そうだった。
だが・・・同時に、楽しそうでもあった。
・・・ったく、女ってのは、本当に解り難い生き物だ。
小さく溜め息を吐いて、俺は織斑と学校に帰った。

キャラクター設定その２（前書き）

ども、作者のジャッキーです。
６月１日から再就職先での仕事が始まり、更新がなかなか出来ずでした。
今回は、その事もあってオリ設定の版権キャラの紹介だけです。
ネタ元はギャラクティカのＰＣゲーム「極道の花嫁」からこの方を

キャラクター設定その２

フランチェスカ・カルディナーレ
１５歳
身長１６０ｃｍ
体重？？ｋｇ
在籍　ＩＳ学園１年１組
専用機　勇敢な翼（アーレ・ブラーヴェ）

イタリアの企業「カルディナーレ社」の令嬢であり、シャル、ラウラと同時期に転校して来たイタリアの代表候補生
だが、本来の目的はシャル同様一夏、そして真人のＩＳの性能データの収集。
制服は従来のスカートタイプではなくスラックス（そちらを履き慣れているため）
社長であり父親のジャンカルロの言葉には絶対的な忠誠心をもち、政略結婚も厭わない。
社長秘書のルキアーノに護身術と銃の手解きを受けており、体術や銃の扱いに長けている。
趣味で鳩を飼っており、そのうちの一羽を学生寮で飼っている
一般的な教養は家庭教師によって教え込まれたが、少々浮世離れしている事もあり、時にトラブルを引き起こす原因にもなりがち

勇敢な翼（アーレ・ブラーヴェ）
カルディナーレ社が作り出した第４世代ＩＳの試作機にして、フランチェスカの専用機
機動力の高さと拡張領域（パススロット）の大きさが特徴で、敵を翻弄しながら量子変換（インストール）した数多の銃を使った近、中距離戦闘を得意とする。

本来なら、銃の特性上近距離は苦手とされるが、ルキアーノによって銃を使った近距離の立ち回りを教え込まれた事があり、その弱点を克服したからこそ行える戦い方である。
展開時は胸と肩、前腕、腰、膝からつま先にかけて装甲が展開され、鳥の翼を模したスラスターが背部にマウントされる。
待機時は鳩を模したネックレストップ

３人の転校生（前書き）

ども、作者のジャッキーです。
この度、本小説がアクセス総数１４万件越え
ポイント４００越え、お気に入り登録２００名に突入しました。

で、仕事が始まったことで更新が遅れてしまった事を深くお詫び申し上げます。
今回は、かなり短いです。

3人の転校生

織・・・千冬との買い物から数日後
クラスの女子が、個人で用意するＩＳスーツをカタログを読んで選んでいた頃
千冬と真耶が来てＳＨＲが始まったんだが・・・。
「えぇとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも3名です！」
っつー真耶の言葉に、クラスがざわついた。
そりゃそうだろう。
ただでさえ、この学園の転入試験っつーのは難しいらしいのに、それをくぐり抜けた3人が俺たちのクラスに入るんだ。
つか、こういう時って転入生を分けたりしねぇか？
んなことを考えていると、教室のドアが開いた。
「失礼します」
「・・・・・・」
「失礼する」
教室に入って来た転校生を見て、ざわめきが止まる。
それが・・・
そのうちの一人が、男だったからだ。

教卓の前に立つ三人の転校生
左から金髪、金髪、銀髪の順に立っている。
名前だが・・・
左端に居る男子はシャルル・デュノア
真ん中に居る男子用の制服を着こなした女子はフランチェスカ・カルディナーレって名前みてぇだ。
で・・・三人目の自己紹介になった訳だが。

服装は男子用の制服だが、ズボンが膨らんでいる・・・なんか、昔見たドイツ軍の軍服みてぇなズボンを履いている。
それに、左目を眼帯で覆ってるうえ、人の視線を集めそうな銀髪をしてやがる。
・・・って、そういや俺も銀髪だったか。
ソイツの名前は・・・ラウラ・ボーデヴィッヒだそうだ。
ボーデヴィッヒは、自分(テメェ)の名前だけ言うと、一夏を見た。
一夏と目を合わせる前までは、何も写してねぇような、空気・・・
いや、氷みてぇな瞳に光が宿った。
それも、明確な『憎しみ』っつー光が。
「！貴様が・・・・・・」
ボーデヴィッヒは、一夏に歩み寄ると、その右腕を大きく振り上げた。
この流れからしたら、一夏は間違いなく頬を引っ叩かれるだろうな。
だが・・・
ヒュッ
「！」
「へぇ・・・」
ボーセヴィッヒの平手は一夏の左腕に止められ、代わりに、一夏の拳がボーデヴィッヒの目鼻の先で止まっていた。
「いきなり殴ってくるなんて、変わったご挨拶だな」
「クッ・・・」
一夏の皮肉を受けたボーデヴィッヒは、憎らしげに手を下げると、一夏を見た。
「・・・私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
そう言うと、ボーデヴィッヒは一夏の前を去っていき、空いていた席に座ると、腕を組んで目をとじ、微動だにしなくなる。
・・・なんだ、ありゃ？
一夏が千冬の弟である事を認めねぇって。

『ガキだな』
俺がふと呟いた言葉に、前の奴の言葉が重なった。
ふと見ると、一夏とボーデヴィッヒのやりとりを見ていたカルディナーレと目が合った。

「あー・・・ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳの模擬戦闘を行う。解散！」
柏手を打って千冬が行動を促し、それに合わせてクラスの奴らが動き始める。
俺と一夏は男だから教室で着替えられねぇ。
今日は第二グラウンドを使うってことは・・・着替える場所は第二アリーナの更衣室か。
そう思って行動を開始しようとしたとき、俺と一夏に千冬が声をかけた。
「おい大神、それと織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」
・・・っと、そういや、三人目（デュノア）の男が居たんだったな。つか、一夏はついでかよ。
「君たちが大神君と織斑君？僕は・・・」
「んなもん後回しだ。一夏、行くぞ」
「おう」
デュノアが暢気に自己紹介をしようとしていたのを遮って、俺と一夏はデュノアを連れて教室を出た。
「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」
「う、うん・・・」
「・・・？」
一夏の説明を聞いたデュノアがどこか落ち着かないような表情を浮かべたのを見て、俺は小さく首を傾げた。

自分たち3人以外全員女子というのは確かに落ち着かねぇだろうが・・・俺は微かな違和感を感じた。

サイドストーリー予告（前書き）

ども、作者のジャッキーです。
長い間更新出来ず申し訳ありません。
本編の更新にはもう少し時間が掛かってしまいそうです。

今回は、その合間に構想を練っていた本作品のサイドストーリー的な物語の予告をしたいと思います。

ちなみに．．．主人公は、「あの男」です。

サイドストーリー予告

銀色の狼が蒼穹を翔る頃、もう一人の主人公の物語も始まった。

『お願いです。ボク達を・・・ 村の未来を救ってほしいのです』

「ふむ・・・」

本来ならば、交わる事すら叶わない時間と世界

未来を掴む為に足掻く魔女と、彼女を見守る神に呼ばれた男

「逃げて傍観者に徹していた・・・か。それで、また『誰か』を頼って自分は見てるだけなのか？」

「ボクは・・・逃げないのです。逃げることは、負ける事にも劣る事なのです」

ただ見ているだけだった神

その神の決意を聞き、男は決める。

壁を越え、世界を渡る決意を。

「あなたは・・・ 誰？」

昭和５８年６月

「俺か？俺は・・・」

惨劇という名の悲劇が起きる村・・・雛見沢に、あの男が立つ。

「九頭龍学園３年・・・生徒会長、大蛇和也だ」

三人の英傑（前書き）

ども、久しぶりの作者のジャッキーです。
今回は、新話が出来上がるまでの間の閑話ということで
今回は、「あの男」に加えて「何度もぶつかり合った馬鹿」が出てきますよ？

三人の英傑

とある休日
俺の部屋には一夏、篠ノ乃、鳳、セシリアといった見慣れた面子がいた。
「なぁ」
「あ？」
窓を全開、換気扇を付けた状態でタバコを吸っていた俺に、マンガを呼んでいた一夏が声をかけてくる。
「真人が通ってた高校って、どんな学校だったんだ？」
「そういえば、私も気になる。大神は私たちの一つ年上だったな」
「私も気になりますわ」
「私も」
一夏の質問に、篠ノ乃を初めとした面々が口々にそう言ってきやがった。
前の高校・・・か。
そういえば、俺が一度死んでから3ヶ月くらい経つんだっけか。
「んな事聞いて楽しいか？」
「楽しいっていうか、真人が通ってた学校が気になっただけだよ」
聞くなら違う話を聞けば良いだろうと思ったが、コイツらは俺の高校の事に対する興味が大きいみてぇだ。
ったく・・・仕方ねぇ。
「・・・俺が通ってたのは九頭龍学園っていう高校でな。進学校だったんだが、はみ出しもの・・・言っちまえば不良だけど、ソイツらも多かったぜ」
「へぇ・・・で、真人はその不良の中の一人だった訳だ」
「まぁな。馬鹿みたいに喧嘩売ってくるヤツが多かったもんだから、買ってるうちに『銀狼』とか呼ばれて大変だったぜ？」
俺の話を聞いている一夏達は、ガキみたいに目をキラキラと光らせ

ながら話に集中している。
それにつられてか・・・俺は更に話を続ける。
「で・・・負けなしとも言われてた俺も、一回だけ負けた事がある」
「「「！」」」
「あ、俺聞いた事ある。たしか・・・生徒会長だったよな」
俺が口にした言葉に、篠ノ乃、セシリア、鳳の三人が驚いた表情を浮かべ、一夏が思い出したように話す。
コイツらは、俺が勝つ姿しか見てねぇから、負ける姿が思い浮かばねぇんだろうな・・・千冬と戦ったときを想像しない限り。
「あぁ。大蛇和也・・・九頭龍学園の生徒会長・・・『龍』だ」
「『龍』？」
「俺の学校の呼び方だ。生徒会を除いた八つの委員会・・・その委員長は、全員『頭』って呼ばれる。『龍』ってのは、生徒会長しか名乗れねぇ称号ってヤツだな」
「八つの『頭』に、それらも統べる『龍』・・・ふむ、学校の名前の通り『九頭龍』というわけか」
俺の話を聞く篠ノ乃が、腕を組みながら小さく頷く。
よく見ると、周りのヤツも同じ表情をしてやがる。
「でも、大神が負けたのって、その大蛇って人だけなの？」
話しているうちに一本吸い終えたタバコを灰皿に押し付けて消していると、鳳が声をかけて来た。
つまりは・・・もっと聞かせろってか？
周りを見回すと、一夏達も「もっと聞かせろ」と言いたげな表情で俺を見ている。
「ハァ・・・負けたのはソイツだけだ。あとは、引き分けが一人だけだ」

「引き分けたヤツ？」
「その方も、委員長でしたの？」
俺の話に、今度は鳳とセシリアが質問して来た。

「いや、そいつは俺と同じはみ出し者だったんだが・・・ 群を抜いてたな」
俺は、アイツの事を思い出して微妙な表情を浮かべた。
なにせ、ヤツは不良からは喧嘩を売られ、体育会系のヤローどもからの人気が高かったからな。
「どんなヤツだったのだ？」
「あぁ・・・２m近くの長身で膝丈の長ラン、髪は後ろで一つに結んでたな」
想像すりゃ分かるだろうが・・・ ヤツの格好は、番長と言っても良い格好だ。
だが・・・ 問題は格好じゃねぇ。
「ハッキリ言ってバケモンだったぞ・・・ パンチでコンクリの壁に穴開けるわ、吼えて窓ガラスに罅入れるわ・・・ そういや、喧嘩売ってた不良(バカ)が2階くらいの高さまで飛んでたな」
「・・・ って、ホントに化け物じゃない！」
「むしろ、そっちに負ける方が頷けるぞ！」
俺の話を聞いて想像していた一夏と鳳が俺にツッコミを入れる。
「そう言うけどな・・・ １００人を1分で沈める生徒会長と3分で沈める番長、どっちが化け物だよ？」
一夏達のツッコミに返すように言った俺の言葉に、全員がげんなりとした表情を浮かべた。
「なんつーか・・・」
「そんな場所で生活してたんじゃ、強いのも納得ですわ・・・」
「で・・・ そのバケモノはなんて名前なのよ？」
げんなりした表情で俺を見た一夏達は、俺にソイツの名前を聞いて来た。
一夏達の言葉を聞いた俺は、窓の外に見える青空を眺め・・・
二度と会う事はないだろう奴らを思い浮かべながら、ソイツの名前を口にした。
「須藤虎徹」

ソイツらが、同じように青い空の下でくしゃみしているとも知らずに

「クシュンッ！」
ひぐらしの鳴き声が響き渡る小さな村、雛見沢
雛見沢にある大きな神社・・・古手神社
そこの掃除をしていた俺は、不意にくしゃみをした。
「あら・・・くしゃみなんて、風邪でもひいたのかしら？」
俺のくしゃみを聞いた、腰まで伸びる黒髪の少女が俺に声をかけてくる。
古手梨花・・・俺が世話になっている少女だ。
「いや・・・これは」
「もしかしたら、誰かが和也の噂をしているかもしれないのですよ？」
軽く鼻を擦る俺の言葉に続くように、梨花と同じくらいの年頃の・・・角の生えた少女が話す。
彼女は羽生・・・この村の守り神であるオヤシロさまであり、俺を此処に呼んだ張本人でもある。
梨花と羽生が話すが・・・俺は、ふと視線を上に上げる。
そこには、夏の日差しと雲一つない青空が広がっている。
俺は、昨日おかしな夢を見た。
銀色に輝く機械の人狼が、青空を気高く、猛々しく舞う夢だった。

「あぁ・・・きっと」
「「？」」
俺が青空を見て呟くので、二人は話を中断して俺を見る。
「きっと・・・好敵手(とも)が、俺の話でもしていたんだろう」

「クシュンッ！」
アメリカの軍施設
そこで、昼食を摂っていた俺は不意にくしゃみをした。
窓ガラスがビリビリと振動し、辺りにいた面々は何事かと慌ただしく辺りを見回している。
「っ～！虎徹！テメェ、ちったぁその声を小さく出来ねぇのか！？今ので窓ガラスが『また』割れるかとおもったぞ！」
俺の右隣で耳を塞いでいた女性・・・イーリス・コーリングが女性には似つかわしくない荒っぽい言葉遣いで俺に非難の声をあげる
「む、すまないコーリング。改善しようとはしているのだが・・・」
申し訳なく頭を下げる俺に、コーリングは『うっ・・・』と言うと、何故か顔を赤くして視線をそらした。
「風邪でもひいたの？薬、持ってこようか？」
コーリングの挙動に首を傾げていた俺に、左隣に座っていた女性・・・ナターシャ・ファイルスが小さく苦笑いを浮かべながら声をかけてくる。
「いや、その必要はない。大方・・・」
そう言って、俺は視線を窓の外に向ける。
そこには、雲一つない青い空。
そこに思い浮かぶのは、俺が唯一引き分けた相手であり、此処に居るであろう好敵手(とも)
荒々しくも気高い狼のような漢

「好敵手(とも)が、俺の話でもしていたのだろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5547s/

インフィニット・ストラトス～嵐を纏う狼～

2011年11月8日02時06分発行